

報 特 攻
 平成10年5月
 第35号

〒105 東京都港区虎ノ門
 3-6-8 第6森ビル
 財団法人 特攻隊
 戦没者慰霊平和祈念協会
 電話 03(3432)1090

編集人 田 中 賢 一
 発行人 木 村 元 正

第19回

特攻隊合同慰霊祭

4月3日 靖国神社

「花の都の靖国神社 庭の梢で咲いて会おう」と御祭神の思いの籠る桜花はまさに爛漫。遺族、来賓、会員合せて四百名に及ぶ出席のもと盛大に行われた。本年特異のことは、知覧なでしこ会26名の出席である。かつて知覧高女の生徒だったとき、出撃する特攻隊員の奉仕をした人達である。

神事は例年通り行はれた。瀬島会長
 の祭文にいう、
 ……(我が国は)まれに見る経済発展を遂げることができましたが、その反面民族の美しい伝統と誇りある歴史は人々の心から失われたのは、まことに残念に存じます。

一方、世界に目を転じますと、戦前植民地として呻吟していた民族はそれぞれ自立を果し、その地歩を着々と固

めて参りました。これはわが国が大東亜戦争を戦い抜いた成果であります。大戦における皆様の足跡は限りなく大きいものと信じております。

私達は皆様がこよなく愛された祖国日本、そしてその心を一日も早く昔日に戻すよう力を尽くして参ります……。神事終了後市ヶ谷の私学会館に移り先ず総会が行われた。理事長が報告した昨年度事業報告及び収支計算書は、この会報の末尾に掲げてある。

続いて日本会議作成の「独立アジアの光」を観覧した。インドネシアの独立記念日に、日本に感謝をこめて現地の婦人連中が、日本の歌愛國行進曲を合唱する場面は感動的である。自虐史観に汚染された者共に見せなければならぬ。このあと懇親会に移り老兵達は思出を語り会ったり、現世相に悲憤慷慨したり。この行事19回を数えるが、出席する会員は殆んど七十才以上、如何に長寿国と雖も抜本的な対策が必要



懇親会



拝殿に居並ぶ

である。



ビデオの一駒 愛國行進曲を唱う
インドネシアの婦人達

目次

特攻隊合同慰霊祭	1
靖国神社慰霊祭に思うこと	2
マリヤナB29に対する攻撃⑦	3
万世特攻基地慰霊祭	5
帝國陸軍空挺運用の変遷	6
柏特攻展	10
有馬海軍中將体当り敢行	15
「対談」生残り特攻隊員の心境①	16
特攻隊絵葉書発刊に因んで③	23
第一御楯隊ビデオの解説文	24
9年度の事業報告	27
収支計算書	28

靖国神社における

慰霊祭に臨み思うこと

昨年愛媛玉ぐし料訴訟で最高裁が違憲判決を出して、心ある日本人の憤激をかった。あの判決に対する反論はさて置き、世の中のあらゆる行為を憲法及びそれに基き制定された法律だけによって律することはできないということとを、確かと認識せねばならぬ。

明治天皇の思召によって創立された靖国神社を、昔は国が管理していた。それがマッカーサーの出した神道指令によって断ち切れ、憲法によって占領終了後も継続している。国民挙つて靖国神社をお守りしてゆく方が、国が丸抱えするよりもよいかも知れない。

しかしお祀りだけは国が主催してやらねばならぬ。戦死したら靖国神社にお祭りするということは、兵士に対し国が約束したことではないか、父に会い度くば靖国神社に来れ」と書かれた遺書は無数にある。その一つを下段に掲げる。また戦友同士でも「花の都の靖国神社、庭の梢で咲いて会おう」と謳った。その戦友も御参神である。すべての戦死者が既に祀られているが、戦後の合祀は神社当局がやったことで、政府は知らぬ顔でいる。

人に対する報恩感謝などということとは道義の問題で、憲法以前の、更に高次元のことである。世の秩序を保つのに憲法や法律だけで律する訳にはいかぬとは明白である。約束を守れということとは法律に書いてない。約束を守らなかつた為に他人に怪我をさせたとか、金銭的な損害を与えたとすると法律に触れるが、唯嘘を言っただけでは法律違反にはならない。だがそのようなことが横行すれば世の秩序は保てない。

最近少年の犯罪が頻発している。刃物で人を刺したり、ヒッタクリをしたり、毎日のように暗いニュースが伝わってくる。勿論それは法による取締の対象になるが、そうなる以前に徳義に悖ることが必ず行われている。その段階で善導しないから、あのような大それたことになる。昔は教育勅語があった。教育勅語に示された徳目に則り、学校でも、家庭でも、地域社会でも、子弟の教育が行われていた。現在はそれが無いのだ。一旦事件が起ると、校長先生は申訳ないと平謝り、マスコミは社会が悪いのだと喚き散らすだけで、道徳教育に取り組もうとしない。

靖国神社の問題もこれと軌を一にしている。下に掲げた「ある特攻隊員の遺書」にある御祭神の心情に、国は何と答えようとするのか。文責編集者

ある特攻隊員の遺書

靖国神社編「いざさらば
我はみくにの山桜」より

愛児に遺した手紙

素子

素子は私の顔を見て笑ひましたよ。私の腕の中で眠りもしましたし又御風呂と一緒に入った事もありました。

素子が大きくなって私のことが知りたいときは、お前のお母さんか佳世子叔母様に私のことを良く御聞きなさい。私の写真帳もお前の為に家に残して在ります。

素子と言ふ名前は私が付けたのです。素直な心のやさしい思ひやりの深い人になる様にと申つて、御父様が考へたのです。(略)

私は御前が大きくなって、立派な花嫁さんになって、幸になるまで見届けたいのですが、若し御前に私を見知らぬままにしてしまつても決して悲しんではなりません。御前が大きくなつて父に会ひたいときは九段(註)靖国神社のことへいらつしやい。そして心に深く念ずれば必ず御父様のお顔がお前の心の中に浮びますよ。

父は御前は幸せ者と思ひます。生まれながら父に生写しだし、他人々も素子ちゃんを見ると眞久さん

んに会つて居る様な気がすると良く申されて居た。又御前の御祖父様御祖母様は御前を一つの希望にして御前を御可愛がり下さるし、姉様も又御自分の全生涯をかけてただただ素子の幸せのみ念じて生き抜いて下さるのです。必ず私に万一の事あるも親無児などと思つてはなりません。父は常に素子の身辺を護つて居ります。先に言つた如く素直な人に可愛がられるやさしい人になつて下さい。お前が大きくなって私のことを考へ始めた時に、此の便りを読んでもらひなさい。

昭和十九年〇月吉日 父
植村素子へ

追伸 素子が生れた時オモチャにして居た人形は御父様が載せて自分の飛行機に御守り様として乗せて居ります。だから素子は御父様と一緒に居たわけです。素子が知らずに居ると困りますから教へて上げます。

素子殿 父
植村眞久命 学徒出身

昭和19年10月26日、「第一神風特別特攻隊大和隊」隊員として「爆装零戦」に搭乗、比島セブ基地を出撃、スリガオ海峡周辺洋上にて戦死。

マリアナB-29の基地に

対する陸海軍の経空攻撃

未発に終わった空挺特攻作戦 其の三

剣作戦参加の陸軍部隊

海軍が計画した剣作戦のことは33号で述べたが、それには陸軍からも二個中隊が参加している。その頃内地に残っていた陸軍の空挺部隊は、第一挺進団と再建途上の挺進飛行団だった。第一挺進団は宮崎県の唐瀬原基地に在ったが、その年の5月航空総軍では、南九州に敵が上陸した場合挺進団全部

園田隊編成

7月末のある日、挺進第一聯隊長の山田中佐は、命令受領のため航空総軍



大尉 園田

司令部に出頭を命ぜられ、本部付の園田大尉を帯同して市ヶ谷台面上に向いた。命令とは、「サイパン攻撃ノタメ二個中隊ヨリ成ル特攻隊ヲ編成シ海軍総隊司令長官ノ指揮下ニ入ラシムベシ」というものであった。

が地上戦闘に巻き込まれることを避ける為、挺進第一聯隊だけを千葉県横芝飛行場に移した。

海軍側から剣作戦部隊の増強の為兵力の差出しを求められ

た大本営陸軍部は、横芝に在る挺進第一聯隊長山田秀男中佐を市ヶ谷に招致した。以下述べることは、同聯隊付の園田直大尉(戦後外務大臣や衆議院副議長等を歴任)が生前供述したことをもとに取りまとめたものである。

⑦

そのあと大本営陸軍部の晴氣参謀が具体的な説明をした。これは海軍が計画した作戦で、一式陸攻二十数機に搭乗して、サイパンのアスリート飛行場に着陸する作戦であるが、陸上戦闘については陸軍部隊にお願いしたいといふので、最精鋭部隊を差出すことになった。海軍ではこれに併せて潜水艦で上陸することも考えている。そのような説明があつて、別れるとき、晴氣参謀は園田大尉に、しんみりした口調で言った。

「この戦争、勝つても負けても我々は生きておれないだらうなア」と。

園田はこれを聞いて、特攻隊を送り出す上級司令部の苦衷はさもありなんと、唯それだけを感じとつたが、終戦直後晴氣少佐が市ヶ谷台上で自決し、晴氣少佐とサイパンの関係を知るに及び、園田は改めてそのときの情景を思い起した。

晴氣少佐は参謀本部にあってマリアナ諸島の防備計画を担当し、敵の進攻間近になつて、マリアナの第三十一軍参謀に補せられ、赴任しようとしたが既に交通が絶たれて行くことができなかった。引き続いて参謀本部にあって、サイパン玉砕の報に接し、その後サイパンに進出したB29が猛威を逞しくするのを見て、責任万死に価すると思つ

ていたのであろう。その気持が園田に對する一言となつた。

さて、山田聯隊長と園田大尉は、かねて覚悟していたものがきたという感じで市ヶ谷台を辞去し、横芝に向つた。千葉駅まで来たとき空襲警報で動けなくなった。避難する市民の群をみて園田は言った。

「聯隊長殿、今度のこと一つ私が死にませう。どうぞせ早いか遅いかの違いですから」

これで指揮官は決定した。特攻隊の編成は園田に一任され、第一、第二の両中隊をそのまま連れて行くことになった。第一中隊長は山本章大尉、第二中隊長は大屋稔大尉だった。

横芝の町民は特攻隊の出陣と聞き、紅白の餅を搗き職を立てて行を壮にした。戸山学校軍楽隊が「特攻隊」の曲を奏でる中を、園田隊長は例の長刀を帯び部隊を指揮し、聯隊長に申告した後、見送りの将校に向つて、「じゃア、お先に」と一言別れを告げた。

園田隊長は偵察機で、部隊は列車で、それぞれ三沢に向つた。少し遡るが海軍側の記録には次の通り書かれている。

その後剣作戦部隊には陸軍空挺部隊が加えられることになり、このため豊

田軍令部総長は7月27日、小沢長官に對し「航空総軍司令官隷下第一挺進団ノ一部(約三〇〇名)ヲ指揮」すべき旨を發令した。

小沢長官は同日、陸軍兵力と第三航空艦隊、第一航空戦隊から差出の一式陸攻計三〇機と第二劍作戰部隊を編成すべく、寺岡長官に所要の命令を發した。第二劍作戰部隊の編成に伴い、従前の劍作戰部隊は「第一劍作戰部隊」と呼称されることになった。園田直大尉の率いる陸軍空挺部隊は8月6日、千歳基地に進出して寺岡長官の指揮下に入った。

三沢—千歳、そして終戦

8月初に三沢に全員勢揃いした。海軍総隊司令官小沢治三郎中将は「全員特攻の秋が来た。陸海軍心を一にし、大痛撃をサイパンに加えようではないか」と訓示し、天雷特別攻撃隊と命名した。

海軍選り抜きの搭乗員をもって編成した一式陸攻三〇機の飛行隊と園田隊をもって、第二劍作戰部隊を造ることになった。

7月決行の劍作戰が延期になったが、その間の事情と8月実施の計画について、海軍側の記録は次の通りである。

1 式 陸 攻

海軍総隊では、7月下旬に作戦を実施する予定で準備を進めた。ところが7月14日、三沢基地は米機動部隊の空襲を受け、同基地にあった劍作戰部隊の陸攻が潰滅的打撃を受けてしまった。豊田軍令部総長は25日、劍作戰の延期のやむなきに至ったことを、次のように奏上しなければならなかった。

劍作戰ハ今次月明期ニ実施ノ予定ナリシ処七月十四日ノ敵機動部隊ノ三沢方面空襲ニ依リ陸攻一八機ノ被害アリ

百万手段ヲ尽セシモ天候不良及其ノ後敵機動部隊ノ策動ニ依リ機材ノ準備間ニ合ハザリシヲ以テ 準備訓練ヲ完全ニシ本作戦ノ必成ヲ期スル為 次期月明期8月18日以降ニ延期ノ已ムナキニ至レリ

8月に実施予定の劍作戰には第二劍作戰部隊も参加することになった。劍作戰部隊の攻撃基地に対する指向兵力は次のようなものであった。

第一劍作戰部隊 グアム 二〇機
テニヤン 一〇機
第二劍作戰部隊 サイパン 二〇機
テニヤン 一〇機

さて、第二劍作戰部隊は三沢で計画を練り、千歳に行き訓練を行うことになり、部隊は鉄道で、隊長以下数名は飛行機で千歳に向かった。8月6日千歳東飛行場に終結完了した。先ず陸海軍一体の団結を固めることが第一である。千歳の海軍部隊は園田隊の入る三

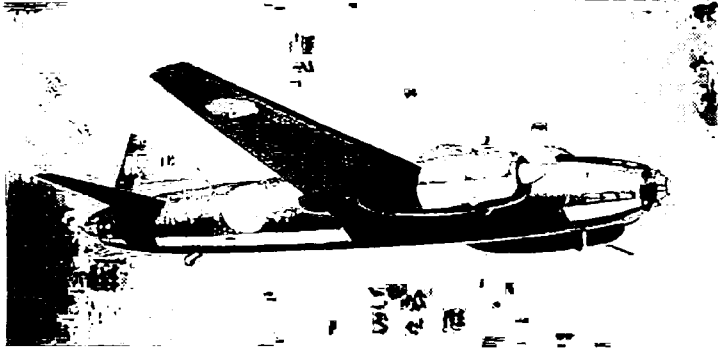
角兵舎の入口に鳥居を建て、園田神社と大書してあった。鳥居は靖国神社に行つてからでよいのにと苦笑したが、悪い気持ちはしなかった。ここで陸海軍が起居寢食を共にし、救国の人柱となるよき士縁に結ばれたことを感謝しつつ、ひたすら訓練に打ち込んだ。

8月15日、重大放送ありと聞き、マリアナ攻撃に対し大元帥陛下親しく激励を賜るか、ラジオの前に全員整列して固唾を飲んだ。玉音は聞き取り難かったが、共同宣言受諾ということの意味も判らず、園田隊長は「戦を一時ストップせよ」との仰せで、そのうち再行が発令されるであろうと説明し、自らもそう信じた。暫くして正式に停戦が命ぜられ部隊は騒然とした。

血気に逸る将校の間に次の二案が議論された。その一つは、予定通り発進基地厚木に進出し、天下の形勢をみること。この頃厚木の海軍航空隊から徹底抗戦の呼びかけがあり、厚木に行けば局面打開の前途が見出せるかも知れないと思つた。もう一つは、北海道と本州は遮断され、北海道は別の国になるかも知れぬ。そのときは北海道に残り、この広大な天地で民族自立のため一働きしよう、という考えであった。

園田隊長は前者の案を採つた。17日、全飛行場に出動を命じ、乗れるだけの部隊を載せ、先ず松島飛行場まで飛んだ。厚木の状況がよく判らないので、松島で形勢を見ようとした。

松島に着き、陸海軍人に賜つた終戦の勅語を拝し、承諾必謹に決した。マリアナに突入しようとしたこの飛行機をむざむざ敵に渡すことは忍びずと君が代のラップを吹奏しつつ火を放つた。搭乗員も空挺隊員も紅蓮の焰を眺めて



慟哭した。総てが終わったのだ。身体
の隅々にまで浸み込んでいた忠誠心が、
行き場を失い、悶え苦しみ、やがて凍
結し、茫然自失、身体は一切の動きま
で止め、空しく焰を見詰めた。

その晩は瑞巖寺に泊った。松島の景
勝と大伽藍に接すると、国破れて山河
あり、日本の国にこの山河と伝統が存
する限り、まだまだ亡びることはある
まいと一縷の光明を見出すことが出来
た。

夜通し語り合った。後に続く者を信
じて往った戦友のことを考えると、断
腸の思いであるが、阿南陸相の遺書に、
「神州の不滅を信じ」とあったことが
伝えられ、神州不滅のためにこそ、
我々が国家再建に挺進しなければなら
ない。

園田隊長は自己の決心の遷り変りを、
そのまま部下に語った。話しているう
ちにまた新たな決意と感激が湧き出て、
やがて短い夏の夜は明けた。

園田が厚木に前進すべきか否か迷っ
たとき、心の拠りどころとなった勅語
をここに掲げ、同じ思いに当面した
我々の、往時を偲ぶがよすがとしたい。

大東亜戦争終戦に際シ 陸海軍人二賜ハリタル勅語

昭和二十年八月十七日

朕曩ニ米英ニ戦ヲ宣シテヨリ三年有
八ヶ月ヲ閱ス 此間朕カ親愛ナル陸
海軍人ハ瘡痍不毛ノ野ニ或ハ炎熱狂
濤ノ海ニ身命ヲ挺シテ勇戦奮闘セリ
朕深ク之ヲ嘉ス
今ヤ新ニ蘇國ノ参戦ヲ見ルニ至リ内
外諸般ノ状勢上今後ニ於ケル戦争ノ
繼續ハ徒ニ禍害ヲ累加シ遂ニ帝國存
立ノ根基ヲ失フノ虞ナキニシモアラ
サルヲ察シ帝國陸海軍ノ剛魂尚烈々
タルモノアルニ拘ラス光榮アル我國
體護持ノ爲朕ハ爰ニ米英蘇並ニ重慶
ト和ヲ媾セントス
若シ夫レ鉞鋤ニ斃レ疫癘ニ死シタル
幾多忠勇ナル將兵ニ對シテハ衷心ヨ
リ之ヲ悼ムト共ニ汝等軍人ノ誠忠遠
烈ハ萬古國民の精髄タルヲ信ス
汝等軍人克ク朕カ意ヲ體シ鞏固ナル
團結ヲ堅持シ出處進止ヲ嚴明ニシ千
辛萬苦ニ克チ忍ビ難キヲ忍ヒテ國家
永年ノ礎ヲ遺サムコトヲ期セヨ

万世特攻碑前 特攻戦没者慰霊祭

第27回 4月12日

万世特攻慰霊碑奉賛会（会長は加世
田市長）主催のこの祭典は、遺族、
来賓、戦友等二百余名が参列して行は
れた。沖繩作戦にあたり万世から出撃
した特攻隊は62、63、64、66、72、73、
74、75、102、104、141、144、432、433の各
振武隊計一二〇人であり、20年4月3
日から6月8日の間に出撃している。

また同基地に在った飛行第55、66の両
戦隊も多くの戦死者を出している。更
にまた飛行場建設当時から事故死し
た町民もある。これらの御霊に対し参
列者が交々花を捧げ合掌した。

この碑の敷地内に加世田市平和祈念
館があり、その中には全戦死者の写真
や遺書遺品等が展示されている。



記念館内部

帝国陸軍における

空挺運用にみる統率姿勢の変遷

—特攻に傾きゆく過程—

田中賢一

我が陸軍における空挺作戦で、実施されたものは三つある。即ちパレンバン、レイテ、沖繩の三つである。それ以外にラシオ空挺作戦は発起したが天候不良で引き返し中止となった。またニューギニアのペナペナ・ハーゲン作戦は計画段階で取りやめになった。更に終戦前に二つの特攻作戦を準備したが、終戦により未発に終わった。これらを通看してみると、使う側の統率姿勢に、初期と末期では著しい違いがあるのは当然の帰趨と言えよう。

標題に掲げておいたように最後には特攻用法になってしまふのだが、特攻を統率の面からみると、後世の論評は否定的なものが多い。しかし特攻用法に走らざるを得なかつたということも十分に考察しなければならぬ。更に当時の軍隊が、或いは当時の若い軍人が、そのような運用によく応えることが出来たことも確かと認識しなければならぬ。そればかりではない、以下述べる空挺の運用においては、初期の段階か

ら使われる側に、作戦上それが必要であるならば、収容の見込みのない処にでも喜んで飛込んで行くという気構えが、漲っていたことも見逃してはならぬ。それを特攻精神であるとしたならば、上級指揮官が特攻運用に踏み切る以前から、部隊側にそれが芽生えていたと言えよう。そのような観点で以下史実を述べる。

パレンバン作戦

国軍初めての空挺作戦で南方軍が慎重だつたことは当然といえよう。それは二つのことに現れていた。その一つはこの作戦を以て16年12月13日に門司港を發つた挺進第1聯隊が、輸送船明丸丸の海難によつて戦力回復に手間取り、代わりに編成完結を早め急速に招致した第2聯隊を起用することになった。挺進第2聯隊がまだ仏印に向かう輸送船上にある間に、1日(スマトラ上陸日)は10日、従つて降下は9日ということが、1月28日に海軍との

協定できまつた。このときは空挺作戦の実施は無理かと思はれたが、待つていた挺進第2聯隊の乗つた輸送船が30日にカムラン湾に到着した。1日は海軍側の都合で二回にわたり延期され、最終的には15日、即ち、降下は14日となり救われたのであるが、その間南方軍は終始慎重だつた。

挺進第2聯隊が編成早々であり、しかも作戦準備日数が極めて僅少なので、国軍最初のこの作戦に失敗すれば悔いを千載に残すとて、パレンバン飛行場に降下しないで、西北方250キロも離れたジャンビー飛行場に降下し、自動車を奪つて前進するというような案を立てた。これに対し久米挺進団長や16軍の井戸田參謀は猛反対をして、この案は立消えになつた。

次は攻撃目標のことであるが、南方軍では作戦上の要求だけを考へ飛行場奪取を重視し、精油所に対しては、成し得れば敵の破壊に先立ち占領確保するように命じている。これも少兵力で最初から二目標を与え多大の損害を出すことを恐れたためである。これに対し挺進団側は内地を出るとき大本営から精油所の写真をもつて、精油所の機能について鶴見の日本石油で教育まで受けており、むしろそれが主目標と思ひ込んでいたので、第3飛行集団に

意見具申し、最初から一部兵力を精油所に降下させることになつた。このように南方軍は慎重過ぎると思はれるほど慎重だつた。

ラシオ空挺作戦

パレンバン空挺作戦が成功裡に終わった後、ジャワ、スマトラ正面には空挺作戦の場はなく、舞台はビルマに移つた。今度は南方軍では余り細かいことまで規制せずマン会戦の一環としてラシオ附近に使うことだけを命じ、あとは配属先の第5飛行師団に任せられたのであるが、その責めを第5飛行師団にだけ負はせるのは酷かも知れない。初めは第56師団がラシオ附近に進出できるのは5月10日頃と見込んでいた。それがパレンバンの場合とは逆で投入時機がほとんど早まつていった。地上部隊の進攻が予想外に早かつたのである。

第5飛行師団にとつては勿論初めての空挺運用である。過早に投入して多くの損害を出してはならないという懸念が大きかつた。24時間で提携できることを絶対要件と考へていた。一方使われる側の第1挺進団は自信満々であつた。今度は前回不運に見舞はれて功を奪われた挺進第1聯隊が主体で、

それに前回翌日降下した第2聯隊の一個中隊や輸送機不足のため基地に残された者の集成中隊など、2聯隊が二個中隊、1聯隊が四個中隊の計六個中隊で、バレンバンのとときの倍の兵力である。相手が重慶軍とあつては、中隊長以下殆どが支那戦場の歴戦者なので益々自信を深めていた。M3戦車が強力であるという戦訓情報が与えられたが、意に介する者もなかつた程である。

第15軍の進撃振りを知り、4月25日頃になると第1挺進団では早く作戦を執行しよう第5飛行師団に求めたが、師団では慎重な態度を取り続け29日と示達された。降下部隊の損害を最も心配していたのは小畑師団長だと聞いた。

4月29日天長の佳節、朝もやを衝いて第一次挺進部隊はドングー北、南両飛行場を發進した。ところが、ラシオの手前30分行程ほどのところまで行ったが、密雲が行手を遮りやむなく引返した。もとの飛行場に着陸したのは作戦軍の時間(日本時間)で12時頃だったが、その頃56師団の搜索聯隊はラシオに突入していたのである。

失敗の最大の原因は24時間で提携させようとしたことにある。

ベナベナ・ハーゲン空挺作戦

ベナベナ・ハーゲンはニューギニア

アのマガン及びウエワクの南方、脊梁山系の南側にある東西約二〇〇キロの高原地帯内の町である。標高二千米で氣候快適、地味豊かで耕地は広かつた。戦前から飛行場があつたが使わないので草が伸び発見困難だつた。4月上旬航空偵察によつて連合軍がこの地域に入り飛行場設定中であることが判つた。もし敵航空がこの地区を使い始めると、ウエワク、マガン、ラエ、サラモアと延びている我が軍の横腹に匕首を突きつけられたような格好になる。しかしその地域まで地上進攻することは第8方面軍でも第18軍でも考えていなかった。

5月10日現地視察中の大本営瀬島参謀は、この事態を重視し落下傘部隊の起用について意見具申した。その電文の一節、此ノ際空中挺進部隊(若シクハ輸送機部隊)ノ増派ニ関シ中央トシテ至急研究ヲ進メラレ度とある。大本営ではニューギニア方面の現戦線保持について再検討し、方面軍と連絡するため参謀課次長(眞田作戦課長、大賀中佐、三吉中佐随員)が6月17日東京発、25日にラバウルに到着した。そのときは既に中央では落下傘部隊の起用を決めており、6月19日には第1挺進団と第10輸送飛行中隊に動員が下令された。

挺進練習部研究部長の河島慶吾中佐(33期、間もなく大佐昇任)が挺進団長に補職された。当時挺進団司令部は常設されておらず聯隊や戦隊は挺進練習部長の隷下であつて、動員により挺進団を編合することになつていた。

河島挺進団長は動員下令直後、高級部員市城少佐を伴つて上京、杉山参謀長から激励の辞を受けた。河島中佐は落下傘部隊の創設に携つた人で、当時から参謀総長であつた杉山大将には直接指導を受けていた。以下は戦後河島さんから直接聞いた話である。

参謀総長が言うには、ニューギニアの戦況は重大化している。現在のところ同方面の航空作戦は彼我対等であるが、ベナベナ・ハーゲン附近に飛行場が建設されており、同地区に敵戦闘機が進出するようになれば、ウエワク、マガン方面に対する我が海上輸送は不可能になり、彼我のバランスは一挙に崩れてしまう。この挺進作戦の成否はニューギニア方面の全般作戦を左右するものである。この度陸上航空の精鋭を増加中であり、安じて作戦を遂行し光輝ある成功を収められ度い。

河島団長は挺進団の前進部署を定め、司令部員を伴い7月20日ペリリュー島松島飛行場に到着し、第6飛行師団長の指揮下に入った。ついで22

日ウエワクの第6飛行師団司令部に頭した。ここで、8月下旬を目途に作戦準備を進めるよう指示され、ペリリュー島に集結した挺進第1、第2の兩聯隊は、ジャングル内の戦闘訓練を連日行つた。

河島中佐がウエワクに来てみると第6飛行師団では8月末を目途にとは言ふものの、空挺作戦について何も具体化していなかった。その頃飛行師団は敵に主動権を奪われ戦力が低下し、空挺作戦を行うような意気込みが感ぜられなかつた。そこで翌23日団長一行はラバウルに飛び第8方面軍司令部に頭したが、ここでも何ら具体的な研究がなされていなかった。

このように方面軍で熱がさめていたのは第18軍で研究した結果、ベナベナ・ハーゲンまで地上軍を進めることは地形上極めて困難であると言ひ出したからであることを知つた。そこで今度には高級部員市城少佐が兩聯隊の主務者を伴つてマガンの第18軍司令部に向向した。ここでも何等具体的な研究がなされていなかったが、次のような情報は得ていた。

同方面の高地一帯の人口は約6万人である。天然資源に恵まれ野菜は豊富、マリヤは少く、道路は四通発達、戦前からあつた飛行場は十三個、現に敵

が使用を予定している飛行場は四個、そのうち一個は現在使っている。ベナベナに蒙州軍の一個大隊と高射砲のあつたことは確実である。この方面の敵は空輸により維持されているが、8月上旬には二千乃至三千名になるであろう。

挺進団では既にベリリユーからウエワクに向け、各中隊差出しの設営隊一五〇名を出発させており、騎虎の勢いである。地上進攻が困難とあらば我々だけで戦えばよい。二、三千の敵兵など物の数ではない。降下後の空中捕給が期待できないならば糧は敵に依る。

この意見は団司令部だけでなく、むしろ聯隊の方が強く主張し、第6飛行師団に具申したが取り上げられなかった。ベナベナ・ハーゲン作戦は延期という形で保留されたが、9月25日になって正式に中止が決定された。

次に述べるが、挺進団が具申する特攻的用法は、これより一年後の19年末には直ちに採り上げられたのに、18年にはまた収容の見込みのないところに部隊を投入することはなかった。統率は健全だったといえる。

レイテ空挺作戦

レイテ島に対する空挺作戦には二つがある。その一つは19年12月6日に脊梁山系の東方地区に対して行はれたも

ので、もう一つは12月8日から数日間、オルモック北方のバレンシヤに降下し、第35軍の増援に任じたもので、後者は本稿の対象にはならないので前者だけについて述べる。

この作戦は結果的に見れば無意味な作戦と思うが、マニラにあって計画した第14方面軍や第4航空軍では、ブラウエン地区に対する空挺作戦と、山越えて同地に進出する第26師団をもって、戦勢挽回の契機を掴もうとしていた。

挺進団でもそのように聞かされ可能性があると信じていた。従って三回に亘る空輸で挺進団全力をブラウエン地区に注ぎ込もうと計画していた。第一次挺進部隊は夕刻に、第二次挺進部隊は後半夜に降下し、第35軍に対しては第16師団をその晩ブラウエン北、南両飛行場に突入させるよう命じたのであるから、降下部隊を見殺しにしようとは考えていなかった。問題は次の点にある。

レイテに向う輸送船が次々と撃沈されるのは、レイテ島の飛行場にある敵航空によるもので、ブラウエン地区の三飛行場は今回の攻撃目標となつてい

いくら敵情を甘く見ていたといつても、ここまで地上部隊が進出できるとは思っていない。収容の見込みのない特攻的用法である。このことを初め言いつたのは遅れて到着した挺進第4聯隊である。輸送船の都合でこの聯隊の到着が遅れたので、第一次降下部隊は全部第3聯隊となつてしたが、第4聯隊の強い希望があり、また挺進飛行隊も間際になって一個中隊増加したので、徳永挺進団長もその気になり第4航空軍に具申した。4航空軍ではその案を直に受け入れて計画を変更した。

徳永団長は、それでも収容の見込みのない処に部隊を投入することに抵抗を感じてか、出発間際まで敵飛行場に

一撃を与えたら敵中を潜行してブラウエンに來れと練り返し論したという(海上に撃墜されて捕らえられ戦後帰還した一曹長の証言)

義烈空挺隊

タクロバンとドラッグに向つた輸送機九機、重爆四機は全部撃墜され、生きた爆弾も不発に終つてしまった。前掲のベナベナ・ハーゲン空挺作戦と対比してみると注目し得る史実である。

11月末、第1挺進団に対し、サイパン島B-29基地攻撃のため一個中隊の差出しを、当時所属していた教導航空軍から命じてきた。また当時浜松で機種変更の終わった第3独立飛行隊には、任務としてサイパン島アスリート飛行場に対する強行着陸が命ぜられた。潜入謀者ということと奥山隊に加つた中野学校出身の一〇名だけは、志願により入選されたが、他は全部命令によるものだった。

統率の姿勢という観点から言えば、個々の人員が志願によるか命令によるかということだけで、あとは特攻隊が統率の正道からはみ出ているのでこれ以上述べることはない。

唯一つだけ申し度いことは、サイパン攻撃が中止になった後何故いつまでも特攻隊として留めておいたのかということである。四ヶ月余り奥山はその間中隊の統率について苦惱している。諏訪部も同様だっただらう。サイパン攻撃が不可能になった後、硫黄島攻撃に使はれなかった。その狙いが何であつたか、尋ねてみる人もなく文書も残っていないが、どこかに使はねばならぬという思いが潜んでいたと思う。

最後の沖繩に使うことについて、6航空軍の井戸田參謀が強く主張し、大本営ではなかなか認可しないのを強く押

し切つて使用することになった。これは戦後私が入手した井戸田メモによく現れている。菅原軍司令官に私が戦後伺つたところでは、井戸田参謀の熱意に引きずられた。よき死に場所を与えたいというのが当時の心境だった。という答えが返ってきた。

終戦によつて未発に終つた 二つの作戦

その一つは剣作戦と称し、公刊戦史の「聯合艦隊7」に載っている。海軍101特別陸戦隊を一式陸攻に乗せてサイパン飛行場に強行着陸させ、飛行場にあるB-29を壊滅しようとするものである。20年初頭に義烈空挺隊がやうとしたことと同じである。陸軍の九七重では硫黄島中継を必要としたが、海軍の一式陸攻ではその必要はない。第一陣として101特別陸戦隊(山岡部隊)が使はれるが、海軍にはこれ以外に手持ちの部隊がないので、後詰めとして陸軍から挺進第一聯隊の二個中隊(隊長園田大尉)を差出し、聯合艦隊司令長官の指揮下に入れた。

B-29の日本空襲の機を捉え、それに追尾して厚木を発つてサイパンに向かう計画だった。もう一ヶ月戦争が終

いたら両部隊とも使はれていたのであらう。沖繩に突入した義烈と同じく純然たる特攻隊であるが、当時海軍の当事者がどの程度成功の確率を見込んでいたのか、生還の見込み皆無の特攻であつても成功の確率が高いと思つて命ずると、成功させる確信もなしに使うのでは、統率の常道から外れる程度に大きな違いがある。

次に未発に終つたもう一つの特攻作戦について、これは私自身が深い拘り合いを持っているので思い出を語ることになる。当時私は挺進集団直轄の戦車隊長だった。この部隊は「ク-7」滑空機に乗つて敵中に挺進する部隊だったが、「ク-7」の量産がストップになつたので戦車は運べなかつた。しかし「ク-8」は滑空飛行戦隊に多数装備されていたので、戦車より軽い兵器ならば空輸は可能だった。私の部隊は19年暮に他の滑空機搭乗部隊がルソン島に渡つたのに内地に残された。同じく内地に残つた第一挺進団に配属され宮崎県川南村にいたが、6月になつて本土決戦のために第57軍に配属になり都城に移動した。そこで都城平地における対空挺専任部隊を命ぜられた。

確か8月初だったと記憶するが、「ク-8」に機関砲搭載の四輪駆動小

型貨車を乗せて沖繩の飛行場に着陸し、そこに在る敵機を焼夷弾で撃つて廻るから、指揮官を含めて自動車操縦手二四名を差出せという電報が航空総軍から届いた。何のこともか咄嗟には理解できず、川南にある挺進団司令部に連絡将校を出すと、航空機用20ミリ機関砲搭載の小型貨車一二輛は中央で準備する。砲手24名は挺進第二聯隊の将月中尉以下人選も済んだ。戦車隊からは隊長を含み24名の操縦手を出せという急な命令だった。

挺進戦車隊は戦車、歩兵が各一個中隊と材料廠、それに小型貨車六〇輛を持つ自動車中隊が加わつた編制だった。自動車中隊は挺進集団の輜重隊の性格の部隊であるが、小部隊なので便宜上戦車隊の中に入つていた。

差出し命令を受けた私は、自動車中隊長広田大尉を呼びこのことを話すと、彼は眼を輝かして「私をやつて下さい、操縦手も私の中隊から出します」と立ちどころに答えた。この人は幹部候補生出身の特別志願将校で、敵戦車に爆薬を抱いて体当たりすることを訓練し、自分が先頭に立つてやる人物だった。私は広田大尉には言はなかつたが、この作戦には危惧の念を持った。滑空機が夜間沖繩の飛行場に着陸できるかどうかは、滑空飛行戦隊の古林隊長

の意見を聞いて決めたであろうが、私のところの自動車中隊は、物資輸送の訓練しかやつていない。戦車の戦闘操縦のようなことを訓練したこともないし、第一この車輛は四輪駆動といつても路外性は極めて乏しい。出力も確か25馬力だと思つたが大したこともない。着陸できたら歩兵が暴れ廻つた方が遙に効果的である。

実行部隊の意見を全く聞くこともなく、機関砲の焼夷弾で射ちまくるなど、航空総軍の一幕僚の思いつきで、私の部下を召し上げ死地に投ずるとは何ごとかと憤懣を禁じえなかつたが、当時の情勢ではそんなこと言つて拒否することはできない。広田大尉以下は福生飛行場(現在の横田基地)に向つて出発した。私も同行して作戦準備を手伝うべきだったが、都城平地の対空挺戦闘計画のためやらねばならないことが山積していて、任地を離れることはできなかつた。

終戦により未発に終つて幸だった。中隊長広田大尉は戦後物故したが、その遺族とは今も親交がある。あのとき発進していたら、遺族達(妻帯者は中隊長だけだった)に対し、私はどのやうに接していたであらうか。

特別攻撃隊資料展開催

前号で予告した通り「特攻散華」と題するこの資料展は、2月28日から3月3日の四日間、東武柏駅ビル内で行われた。観覧者延二〇一三名で、老若男女の観覧者に多大の感銘を与えたことは、次に出してある三八通の感想文に現れている。

展示品概要

○靖国神社借用品

遊就館展示品 33点

倉庫保管品 82点

○自衛隊第一空挺団借用品

義烈空挺隊遺書等 8点

○特攻の油絵

特攻慰霊協会員（松本武仁、伊藤直之、市川国雄、海法秀一）の画いたもの 26点

○特攻隊員辞世の歌 伊藤直之選30首

○特攻碑一覧表等その他関係ある資料

以上総計250点

主催は我が協会会員の中江仁所掌の偕行生涯学習塾となっているが、準備から運営一切に携ったのは、常盤陸士61期生会で、29名の者が協力して遂行した。特攻慰霊協会も後援し、役員の有志が協力した。

我が協会は会名に慰霊を冠している

が、冒頭ページ慰霊祭記事にも申しとおいた通り、年寄りだけが集って慰霊祭を行っても何の価値もない。後世に特攻隊の史実とその精神を伝えなければならぬ。次に掲げておいた參觀者の所見を読むと、逆に我々の方が感銘を覚える。今回の特攻展を主催した人達に衷心より敬意を表する。我が協会としても、大衆就中若い人に呼びかけることを考えねばならぬ。

今回の催はビデオに収めてあるので、二千元（送料別）で頒布する由、申込先 〇四七―三三―二五六 中江仁へ



參觀者の所見

(男性)

1、亡くなった叔父が、土浦の航空隊にいたので、今日見に来ました。学校では、教えてくれなかったいろいろなことを見て、思はず涙してしまいました。ありがとうございます。

2、ぼくは、いままで、戦争のことなんか、気にしなかったけれど、ここに来て、戦争に行った人たちは、とても努力し、がんばっていたということ、ここで実感し、よかったと思う。(11歳)

3、戦争に行き、帰らぬ人の身になってみると、どうだろう。空からのこうげきで、飛行機ごと体当たりして、自分の身をなくしている。なぜ、そのようなのかな？ 日本を守るぞ』として、どうなるかが、日本を守るぞ』として、どうなるか。しかし日本は負けてしまったけれど、今は、日本はとも平和だ。戦争に行った人、行って、死んでしまった人にお礼を言いたいと思う。(11歳)

4、今日、特攻隊に選ばれた人々の勇気が、よくわかった気がする。血で書いた文等を見ると、戦争のざんこくさ



もわかった。特攻隊員の命をすてても、外国の空母等に、とつげきするという気持が、すごいと思った。ぼくも、特攻隊のような気持ちで、何ごとにも、とりくんでいきたい。今日は、学校の授業以上に勉強になった。(12歳)

が、これほどひさんなものとは思はなかった。国のため死んで行く人達が、とてもいさましく思えたが、二度とくり返してはならないと思う。(12歳)

5、この戦争の展示会に来て、ぼくは、おじいちゃんや、ひいおじいちゃんは、とてもすごいなあと思いました。死んでしまうかくごで、戦うということ、とてもたいへん(言葉ではいきれないほど)だなあと思いました。もしも、おじいちゃんが、死んでしまっていたら、この展示会を見ていないかも知れないし、おじいちゃんが、すごい人なのだなあと思っていなかったかも知れない。せんそうに出て、戦った人が、つらかったということは、当時、くらしている人も、つらかったということも、頭にいれておかなければならぬなあと思った。今は、日本憲法ができ、戦争がなく、平和になり、ぼくたちが今、ここにいてるけれども、昔のつらかった時代、戦争があったことを、忘れてはいけないなと思いました。(12歳)

7、僕は、この資料等を見て本当に感動しました。自分の国のために、いやりもせず、自分から特攻隊に、しがんだりするからです。前から、こういうことは、知っていましたが、本人たちのいしよをみて、あらためて、かんしんしました。今、中学校の歴史では、戦争について勉強をしています。僕の友達は、あまり、自分の国の戦争などに、きょうみをもっていません。だから、このようなことを通して、もっと自分の国のことを勉強したいと思えます。今、教科書と本当の歴史が違っているのです。もっといろんな学生にも、このことを見てほしいと思います。だから、もっといろんなことを題材にして、また行なってほしいと思います。(14歳)

ものは何なのか、想像もつかない。当時日本が取った行動は、世界に誇るものとは言えない。しかし、それを、まるで汚物でも見るように、見向きもしない今の若者たち、親たちは、それで良いのだろうか。今回のような資料展を見るたびに思うのは、我々が、いったい何が言えるのだろうかということである。私と同じ程の年で散った特攻隊によって、今の我々の生活がある事を誇りに思い、生きて行きたい。(17歳)

(20歳)
11、特攻の戦士達は、どのような心境でコックピットに乗りこんだのか。死を決意した者の心の奥に秘めたものは何であったのか・・・現代の日本、物質的繁栄と、無規律極まる平和の中で社会的な使命も、厳正な義務も与えられていない現代人には、到底計り知れぬ精神世界であろう。しかし、少なくとも、私の目に映る特攻隊員の目は、鋭利な輝きに満ちあふれ、その顔は、充実しきって引き締まり、強固な意志と自信に満ちていた。私は思う。彼等隊員は短かった人生の意味を(何を求めて生きるのか)、その答えを、死の決意の中に見出したに違いない。人は何のために生き、何のために死ぬのか、それは人間の最大のテーマである。現代の社会において、生命尊重が殊更叫ばれているが、それ以上に、このテーマを問う必要があるのではないか。特攻隊員の姿は、現代の我々に無言でそれを問うているのではないか。

8、特攻隊が、今の日本に何を残したか、この平和で過ごす私達には、永久に分からないのかもしれない。しかし、今、私のような若い世代にとって、特攻隊とはどのように写っているのだろうか。私自身でさえ、特攻隊が残した

10、自分と同じくらしい年頃の若者が、将来の望みを絶ち切って、亡くなっていったことが悲しかった。現在でも戦争は世界中で起こっている中で、日本が平和であることをありがたく思うと共に特攻隊を忘れてはならないと思う。

12、国を守るため、家族を守るために、自らの志願で、敵に体当たりする特攻隊の決意の硬さは、私にはとても理解しえませんが、この英霊が現在の日本をどう見るのであろうか。私達は決してこ

う見ることがある。特攻隊が残したものは、私達に何を残したのか、この平和で過ごす私達には、永久に分からないのかもしれない。しかし、今、私のような若い世代にとって、特攻隊とはどのように写っているのだろうか。私自身でさえ、特攻隊が残した

6、戦争のことは、学校で少しやっ

うか。私自身でさえ、特攻隊が残した

うか。私自身でさえ、特攻隊が残した

うか。私自身でさえ、特攻隊が残した

の英霊の意志に反することなく、国を
けがすことは、断じて許しはしません。
近頃の日本は、おかしくなっており、
このままでは、英霊の心を無駄にし
てしまいます。私だけでも、これから先、
この日のことを忘れず国家、社会のた
め貢献していくつもりです。(26歳)

13、戦時中の国民の愛国心に感動しま
した。もんで読んだり、聞いたりはし
て、知っていましたが、改めて直筆の
遺書等を目にすると、やはり熱くこみ
上げてくるものがあります。今の日本
に足りないものを、思い知らされまし
た。(28歳)

14、貴重な資料を拝見させて頂き、と
ても胸につまされました。この頃の同
年代の人と今の若者と比べると、特攻
隊に入り、我が命を大切な人達を守る
ために、捧げていった当時の若者が、
いかに、精神的に立派だったかが分か
ります。今の日本の社会の繁栄は、こ
ういう人達の犠牲があったからだ、と
改めて感謝しなければと、思いました。
戦争という行為は、決して許される行
為ではありませんが、この時代の人を
悪く言うのは、間違っていると思いま
す。なぜなら、この人達は、純真に命
と引き換えに日本を守ろうとしたから

です。この気持ちは尊く、決して悪く
言うことは、誰にもできないと思いま
す。そして、英霊達の死を、無駄にし
ないためにも、今の日本の平和の維持
を、続けていくべきだと思います。と
ても勉強になりました。ありがとうございます。
ざいます。(31歳)

15、私の父も佐賀の出身で、土地柄軍
人志願者が多かったため、父は海軍の
学校に志願して試験を受けて軍人にな
りました。卒業と同時に終戦となり、
現在も元気でおります。私は、幼いと
きから、その父に、特攻隊の話を繰り
返して聞かされておりましたし、私自
信も以前より『きけわたつみのこえ』
等の本も読んで、少しは知識もあつた
つもりでした。本日、これだけ多くの

出撃直前の方々の現物の書き物・写真
を拝見させていただき、心新たに感動
いたしました。死を前にして、各々の
方々の心には『感謝する』気持ちがあ
ちていること、どの方の顔も実にすが
すがしいことであります。現代の物が
満ちてしまった時代の若者には、とて
も見ることができません。現代の若者
は、幸せのように見えても、不幸なの
かも知れません。このことを、もっと
今後も伝えていくべきだと思います。
もっと、国家を思い、他人の幸せのた

めに尽くす教育が必要と思います。こ
のような展示会を開催していただきま
して、有り難うございます。前回の2
・26事件もすばらしかったし、次回も
期待しております。

16、かくも多数の純真な若者が死地に
赴かれたものと胸がいっぱいです。
戦争の正否は別に、このことに、まず、
心を触れさせることが大切でしょう。
この感動に共鳴できなくなると、この
国は終わりでしょう。(48歳)

17、本当に久しぶりに種々の資料を拝
見して、心身共に引き締まるものを覚
えました。皆様方のご苦勞に感謝いた
します。(57歳)

18、私も62歳、小学校3年の時、豊橋
市に住んでいたが、海軍航空隊の基地
が近くにあって、家には、海軍の
若い人も何人も遊びに来ていたのを覚
えております。その人達も、本日の展
示と同じように散っていたのを思い起
こし、こみあげるものがありました。

私の本当の意味で、特攻との出会い
は、恥ずかしながら平成9年11月18日
習志野空挺団の見学からのことでした。
その資料館の見学の折り、たまたま
『義烈空挺隊』という特攻隊があつた

ことを知りました。更に、驚かされた
のは、出発に際してのビデオも存在す
ることでした。空挺団員の説明で、こ
の特攻隊員全員が笑顔で出発してい
ると話されました。皆、にこやかに、こ
れから物見遊山にでも出かけるような
笑顔で、飛び立っていく姿が印象的
でした。日を経るにしたがって、その意
味することの重さを知り、締め付けら
れる思いでした。今の空挺隊も、プ
ライドを持っております。それは、『義
烈空挺隊』の笑顔で国に殉ずる心意気
につながっていることを知りました。

空挺隊の気迫を身に沁みて感じ、この
青年たちがいる限り、日本は安泰であ
ることを強く信じてきました。それ以来、特
攻のことに特に引かれ、その生きざま、
そして死にかた、それは現世代にない
ものを物語り、展示された数々の遺書
や写真は、まさに、これあってこそ、
現代の平和があり、生きるものとして、
この現実があつたことを決して忘れて
はならぬものと思えます。人間と動物
の大きな相違は、理想の実現、国家の
安寧という理念のために、命を犠牲に
することができるといえることである
です。限りなく動物化の道をたどる自由
・民主・平和・人権という死を忘れた
思想のはびこる現代に対する大きな警
告を与えるこの催しです。しかし、意

外に多くの人々の観覧があり、日本人魂の存在を強く感じ、未来の光明を見たと思います。どうかこうした催しを続けて欲しいと思います。(65歳)

19、本日は、『特攻散華』の資料展を見学させていただき、心の芯まで揺り動かされ、痛む思いでした。かくも澄んだ心情で、特攻機に乗り込み、死を覚悟の上、国難に立ち向かった若人に、感動せずにはいられません。現代の日本の礎を作ったのは、戦時中に散華した彼等の武勇ある行動にあると確信しています。現代の日本を見て、果たして尊い命を散華した英霊に報いられたか、もう一度原点に戻って、国民一人一人が考えるべき時だと痛感いたしました。(71歳)

20、私も当時、昭和20年4月に、所沢陸軍飛行学校を卒業し、埼玉県坂戸のつばめ一九〇二隊に配属されました時、坂戸飛行場を飛び立って行った特攻隊を見ておりました。今回、いろいろな資料を拝見して当時を思い出し、目頭の熱くなるのを覚えました。有り難うございました。(72歳)

21、感無量です。散華した若桜、その精神は、高僧以上のものです。小生、

生き長らえて現在に至るは、散華した若桜のおかげです。写真、絵、辞世などものであったか、計りしれませんでした。

22、昨年、この展示会を、見る事ができませんでしたので、今回は是非拝見したくて参りました。私は館林出身です。特操二期として、熊谷飛行学校、岐阜133部隊、マレー野戦飛行補充隊、司偵隊を経て、ビルマにいた飛行81戦隊付で終戦をむかえました。同期生の中から特攻隊員を出しており、この展示の中に知った戦友がいるかと写真に見入りましたが、見つけることはできませんでした。涙があふれてきて、我慢するのが精一杯です。京都護国神社の特操碑の作者は私ですが、裏に刻してある戦死者名で、まだ落ちている方があると、目下二期生会の役員の方に調査していただいております。(78歳)

(女性)

23、戦争の事は、よく知りませんが、とでもさんくでかわいそうな事です。絵を見ても分かるのに、写真があつて、すこいショックです。これを見て、私達もがんばらなきゃいけないと思いま

す。(15歳)

24、昔の人はすごいと思った。死ぬ前に、私は、あんな風に笑えないからです。家族の人の悲しみは、相当のものだったと思います。あの時代の人間でなくてよかったです、しみじみ思いました。写真を見るだけで、怖かったくらいだから、その場にいたら、多分失神しているところでしょう。なぜ戦争は起きたのでしょうか。不幸です。(16歳)

25、突撃前に、とったという写真を見て、私はびっくりしました。なんで、笑顔でいられるのかと思いました。だって、今から死に行くというのに。もし自分が特攻隊に入つて、写真を撮ると言うことになつても、絶対に、笑えないと思う。もう戦争は起きないでほしいと思います。(16歳)

26、私と同じぐらいの人たちが、怖いのをがまんして、相手に突っ込むのは、怖く苦しかったと思う。攻めるのはみんな男だけで、女は、その間、何をやってたのかわからないけれど、きつと怖かったと思う。この時代に、生まれなくて本当によかったと思う。(16歳)

27、17歳くらいで、特攻隊で死んでし

まう人は、とてもかわいそうだと思つた。日本のために、死んだ人が1万人近くもいたのは驚いた。もし、戦争がもっと早く、終わつていればよかったとも思つた。国のために死んで行った人は、とてもえらいと思つた。

28、現代の日本の平和は、当時の若者の尊い犠牲によるものと思います。あの若者達が護ろうとした日本を、引き継ぐことが、いまの私たちの責務です。もっと、日本が、アジアが、よくなるよう自分もがんばりたいと思ひます。

29、戦争のために若い立派な人達が、死んでいったのは、本当に悲しい事だと思ひます。死んで行った人達のためにも、今生きる人は、国を大切にしなければいけないと思ひます。戦争のあつた頃の話が、若い人や子供達にも言い聞かせた方が良くと思ひます。

30、私たち若い世代は、戦争を知りません。平和な世の中に生きていけることは、幸せだと思ひます。しかし、過去は忘れ去られてはいけないと思ひます。また、同じあやまちを二度と、くり返さないためにも、平和な世の中が、永久に続くように、今回のような展示

会は、私たち若い世代が、戦争を知るよいきっかけだと思います。これからも続けていってほしいと思います。

31、時代の違いというものを感じた。昭和20年ごろは、国のためという考えが、あたりまえのように存在していたことを、実感した。これからは、戦争とは無縁な時代、すべての若者が平和な時代をめざしていくべきであると思う。(22歳)

32、絵や、遺書等を見ると、戦争のむごさや、みにくさを感じました。私達の世代では、映画や本などしか戦争という事を受け取る方法はありませんが、二度と起こしてはならないことだと思っています。(23歳)

33、この展示を見て、隊員の家族に宛てた手紙などは、特に胸をうつものがあった。そして、残した家族がいてはじゃまでしょうからと、先に妻子が自殺したという話には、驚きと共に戦争は、すべての人間を苦しめたのだと、改めて思い知らされた気がした。私自身全く戦争を知らない世代ですが、今後生まれてくる我が子にも、このようなことがおこらないようにと、ただ祈るばかりです。(29歳)

34、今回、このような展示を『柏』で見ることが出来、とてもうれしく思います。私は兵隊(特に第二次世界大戦の日本軍)の心のあり方に、とても関心があり、自分なりに本など読んでいます。そしていろいろ思う中、特に特攻に行かれた方の家族を、国を思う気持ちにいつも心をうたれ涙してしまいます。たぶん平和の日は、私達とおなじように生きていたのに、戦争によって、そして自殺ではなく、特攻という日本人だけの戦い方を、自ら選んで行った人達の遺書と写真を見る時、人間はここまで、とうめいな存在になれるのかと思います。私は戦後50年が過ぎ、ほとんどの日本人が、勝手に第二次世界大戦を、忘れようとしていると思います。TVも、本も、もっともっとやらなければならぬと思います。そしてなによりも、学校の授業の中で、もっと細かく戦争について、知らせなければいけないと思います。そうしなければ、再び戦争は起きてしまうと思います。(30歳)

35、今回、最終日に間に合い、会場に来る事が出来、とてもうれしく思いました。今、私はアメリカに住んでいます。今回、帰国し、まず、靖国神社へ行き、いろいろ見学させていただき、

来週アメリカへ帰る前に『柏』で、こんな会を見学出来、会を今回催された方々には、『ご苦労様』とまず、一言と思います。戦争が終わり、50年も過ぎ、その後は各報道機関も、太平洋戦争に關しての番組等とも少なくなりさびしいかぎりです。戦争を知っている方も少なくなりつつある今、その時のことを、うけついでいかなければならないと思います。海外から日本を見ますと、私の考えではありますが、昔のことはなるべく忘れよう、忘れようとする国民と、思えてなりません。もっと日本の近代史を中心に学校でも教えて国外の人へ日本人として、その時のことを説明出来る人をつくる教育をすることも必要だと思います。私はなぜこういう会するとき、見学する様になったかという、外国へ出て暮らし、学校へ行ったりした時必ず太平洋戦争の時の特攻隊のこと、原爆のことをまず質問されました。しかし、それについて、何も知らなかったもので、いろいろ本を、読むようになりました。叔父にもよくその時の事を聞きますが、その時、自分は、一度もう死んでいるからとか、そういう考えになることが、その当時の教育とも考えさせられます。今回、遺書等拝見し、生と死を超え、もう脈脈と流れている何か目には見えない

エネルギーを、感じました。だから死んでいく事にも、もしかしてつらさはあったかも知れないですが、もう、それを超えた何か大きなものにゆだねた大きさを感じました。死んでも生き続けるというか、そういう、物や、家族をも超えてのサイクルを感じました。アメリカでは、戦争の事を一日中放送しているチャンネルもあり、忘れない様になっています。日本もこれから先、多くチャンネルが出来ることを、私は希望します。もう50年以上経っているのですから、軍国主義とか、そういう考えではなく、いろいろな方面から研究し、将来に向けてみんな、知識として持っている様な人間を、教育しないと、同じ様な道をたどって、繰り返してしまう。私は、アメリカで、テレビの企画を作っていますが、近い将来アメリカで、今、飛べるゼロ戦として、チノという飛行場に残っている機での番組を考えています。その時は、またお問い合わせしていただくかも知れませんがどうぞよろしくお願いします。(34歳)

36、戦争というと、昔のことなので、今はもう考えることもほとんどありませんが、本物の資料があると、生々しく感じて、戦争の悲惨さが改めて感じ

られました。また、特攻という、ものすこさを感じました。絵よりも写真、また、実物の方が何か訴えかけてくるものがあります。特に、『やしの実』にこめられたおもいが、すこいと思いましたが、こういう展示を身近なところで、また開いてもらえると皆が忘れなためにもよいと思います。

37、一巡りして、幾度、泪で、写真が、手紙が曇ったことでしょう。本当に意義ある催しをして下さいました。私の兄も戦死しておりますので、胸の中にどっと押し寄せるものがありました。胸の中に、水たまりが出来る程。人間の命というもの、つくづく考えさせられます。漠然として生きている少年達に、是非見て欲しい。いろいろとお骨折り……。どうぞお疲れが出ませんように……。すてきなお仕事に触れて、今日は勿論、しばらく感動の余韻に浸っていきそうです。思いつくままにとまらず、ごめんなさい。有り難うございました。(66歳)

38、私の兄もフィリップスのマニラで戦死致しました。今、あらたに涙をさそわれました。私も寄る年なみ、くじけてはいけなないと、再認識致しました。ありがとうございます。(70歳)

壮絶!!体当り敢行

(海交紙より転載)

有馬正文中将の記

海軍における特別攻撃隊最高責任者として我々の記憶にあるのは大西瀧次郎中将である。しかしながら神風攻撃隊敷島隊が第一陣として関行男大尉指揮の下、昭和19年10月25日、フィリッピン・タクロバン沖の敵艦隊に突入したその10日前台湾沖航空戦において、当時マニラ航空基地の第26航空戦隊司令官有馬正文少将(海兵43期)がみづから一式陸攻に搭乗出撃し、敵艦船に突入、壮烈なる戦死を遂げられた事実については余り知られていない。

時に同司令官は49才であった。将官の身でありながら率先、航空機に搭乗して体当りを敢行、悠久の大義に生きられたのは同司令官が最初であり、この壮挙は海軍軍人に多大の感銘を与えた。一般に搭乗員の最高階級は少佐級であったから異例中の異例と言っても過言ではあるまい。

では同司令官が何故このような挙に出られたのか。その鍵は次の事実にあると云われる。即ち兵学校生徒時代、日露戦争における第2回旅順閉塞隊の相模丸指揮官湯浅竹二郎大尉の遺書に感動したと(自身の日記「従容録」に

述べられていることである。

湯浅大尉の遺書には「従容として義につく」とあり、従容録もそれを採ったものである。同司令官は厳格にして無口であったが、部下思いの武人で、多くの部下から慕われたと聞いており伝えられる話は枚挙にいとまがない。

二、三の例を挙げるならば次のとおりである。毎朝5時に戦斗指揮所に現われ、部下を指導されたこと。また如何なる烈しい空襲があっても指揮所を離れたことなく陣頭指揮を執られたこと等である。また空襲後、滑走路に散乱している爆弾の破片等、部下を指揮し自らもそれらを拾い集めておられたことである。さらに空母翔鶴艦長時代、戦死者水葬の際には艦を旋回させながら同一場所に遺体一体一体葬ったことも知られている。バラバラにせず、一緒に海に眠るよう配慮されたのである。この他、97式大型飛行艇殉戦者の御霊を祀るため鳥船神社を創建されたことは、つとに有名である。

また部下に対して常に丁寧な言葉遣いであったと言う。ために水兵等は戸惑ったようである。

出撃当時、戦力は低下、優秀な搭乗員は次々に戦死し、練度不足の搭乗員が多くなったため、この上は敵の意表をつくような作戦でなければ戦勢挽回

を期しがたいと判断されたのではないかと推測される。重大局面の状況下、指揮官が基地に残って部下だけを死地に投ずること忍び難く、自らも陣頭に立つことを決断されたと思われる。

出撃の15日、戦闘指揮所に、麾下761空の幹部を集めて訓示された。

「これからは体当り攻撃が絶対必要であり、これ以外敵空母を沈める方法はない。しかし若い士官や兵だけ死なせる訳にはいかない。そのためには然るべき指揮官が搭乗して行かねばならない」と述べられた後「陸攻3機、艦攻10機を以て敵機動部隊を攻撃する」旨命令された。

出撃の際、第3種軍装の階級章を外し、飛行服を着し、機上の人となられた。見送った高井攻撃隊長(飛行服を同司令官に貸して差上げた)は、その姿に悠然として死地へ赴く古武士を見たと言う。司令官の出撃は当然上司の許可を得なければならぬが、敢えてせずに強行したとも受けとれる。ただ前日、寺岡一空艦長官にご挨拶申し上げ、暗黙のうちに許可を得たのではなからうか。

有馬少将(戦死後中将に昇進)の体当りは特攻隊以前の特攻とも云うべき壮挙であった。(木村要約)

生き残り特攻隊員の心境 (その一)

による八絃隊12個隊を編成した。

語り手 吉武登志夫(元石腸隊員士57期)

聞き手 遠藤 京子(会員)

聞き手 菅原 道照(会員士61期)

及び記事整理

石腸隊編成さる

我々第57期生は昭和19年3月20日陸軍航空士官学校を卒業し翌21日主として地上軍作戦のための偵察及び指揮連絡、必要に応じ対地攻撃を行なう軍偵察機班として16名が下志津飛行学校に入校した。

教育、訓練の前半三ヶ月は四街道の本校で戦術、気象、写真等の諸学科と通信、偵察、写真撮影の演習、通信筒投下、吊り上げ、布板等による空地連絡、河川偵察、計器飛行、夜間飛行等の操縦実技を修得した。この間、2名の殉職者があった。

その頃の航空状況
敵がレイテに上陸したのは19年10月20日であるが、それに先立つ18日捷一号作戦(比島方面決戦)が下令され、陸海航空部隊は各地から一斉に比島方面に集中を開始した。航空作戦は捷一号決戦成否の鍵であったが、比島にあった我が陸海航空部隊は9月以来、敵機動部隊との戦闘で損耗し、各方面からの集中部隊が爾後の戦闘の骨幹をなすこととなりその到着に大きな期待がかけられた。

石腸隊と私

その頃の航空状況

敵がレイテに上陸したのは19年10月20日であるが、それに先立つ18日捷一号作戦(比島方面決戦)が下令され、陸海航空部隊は各地から一斉に比島方面に集中を開始した。航空作戦は捷一号決戦成否の鍵であったが、比島にあった我が陸海航空部隊は9月以来、敵機動部隊との戦闘で損耗し、各方面からの集中部隊が爾後の戦闘の骨幹をなすこととなりその到着に大きな期待がかけられた。

レイテ決戦の切札として陸軍の中央部は、特別攻撃隊として四式重爆の富嶽隊、九九双軽の万葉隊の他に小型機

八絃諸隊の内、石腸隊を除く11個隊は1個隊12機の編成であったが石腸隊は18機編成でしかも隊員は陸軍航空士官学校(第57期)を卒業し、下志津飛行学校の軍偵(地上軍に協力を任務とする飛行機)班乙種学生課程(実用機戦技用兵訓練課程)を終了したばかりの全員14名を中核に、我々を教育した教官、助教4名を加えた師弟で編成された部隊であった。従って学生教育の延長のような雰囲気と和気藹々、全員使命に燃えて嬉々として第一線に馳せ参じたのである。

苦勞が待ち構えていたが、途中の各飛行場では整備、宿泊、食事等の諸般にわたって協力、支援を受け、特攻隊と知った現地部隊からは精一杯の歓待激励を受け、又安部大尉の誘導、香川少尉の航法援助等により、空襲による焼失機の未補充、第2陣の飛行機も修理整備を要する飛行機はあるものの11月28日全員無事海を越えて戦地に到着することができた。しかし焼失機の補充、整備の遅延などにより全員同時突入とはなり得ず、結局7次に分かれての出撃となった。第1次7機、第2次1機、第3次2機はネグロス島在駐の第2飛行師団の命により、戦局変化推移により、第4次1機、第5次3機、第6次1機、第7次3機はルソン島クラーク基地の第30戦闘飛行集団の命により、夫々敵艦船に体当り散華された。

決戦場へ

11月6日、機材輸送を兼ねるための真新しい飛行機を立川航空廠に受領におもむいたが全機18機は都合がつかず用意された12機を受領し、残機は第8次第受領することとなった。その為8日の比島への前進に当り、18機が一斉に銃子飛行場を出発することができず、先発高石隊長以下11機、後発細田副隊長以下7機の2陣となった。これは一刻も早くという切迫した戦況と、飛行機受領状況等の為の已むを得ない措置であった。

武運拙く

私は12月12日第3次の攻撃隊として参加したがエンジン不調のため遅れ追及し、セブ島上空においてグラマン4機の襲撃を受けエンジン停止辛じてセブ沖のマクタン島に不時着頭部裂傷、右半身打撲の負傷し同島駐屯の友軍に収容されたが頭部裂傷が化膿し熱がでて後頭部から首筋にかけてのリンパ腺がはれて頭を少し動かしてもづきづき

石腸隊の南征途上には飛行機の故障多発、整備の遅延、天候不良、空襲被害などの不測の事故が重なり、様々な

痛み寝たきりの状態が十日位つづいた。19年も押し迫った12月29日、セブ飛行場に一式戦闘機が不時着し、ネグロス島北端ファブリカ飛行場に帰えると言う知らせがあり、急遽頼み込んで一式戦の胴体内に同乗させてもらう事ができ、無事ファブリカまで脱出できた。翌30日連絡のトラックに便乗してシライの第2飛行師団司令部に帰着した。

その頃敵はネグロス島を飛び越えて、ミンドロ島、ルソン島方面に進攻し、ネグロス島は敵の後方に残り残される形となった。

1月9日夕刻、ネグロス島残存のパイロットに対しルソン島に転進すべき命令が下り、日没後トラックにてバゴロド北方約20軒のサラビヤ飛行場に集結し、翌10日早朝3時頃97重爆にてネグロス島を脱出ルソン島ポーラックに帰還した。

敵はすでにリングエンに上陸しており、石腸隊のポーラック残留部隊は1月8日迄に全員突入散華していた。その後ルソン島には私の乗るべき飛行機はなく、ルソン島北部を転々と動き廻り、2月14日操縦者だけがツゲガラオから重爆で台湾に運ばれた。台湾における行動は主題と関係ないので略す。

以下対談記事



菅原・遠藤・吉武

遠藤 吉武さんの手記を拝見して先づ第一に適当な表現ではないかも知れませんが、喜んで征くという内容の言葉が沢山出て来ますが、当時御家族の事を心配される様なことはなかったのでしょうか。そのことを一番疑問に感じました。そういう事が殆んど書かれていない。

吉武 心配とか何とかということとは一寸違うのであって、そういうことより我々は任務の為に征くというのが気持ちでした。

遠藤 家族への思いが湧いて来なかったのですか。

吉武 情が湧かなかったということではありません。家族がいても、我々は任務の為に征くという気持ちで最優先し、家族の事は二の次になります。

遠藤 そういう気持ちになれるものですか。

吉武 こういう歌を詠んでいる人がいます。老いの目に涙殺して笑み給う父上の涙伏しておがみつ”というのがあります。これは家族を置いて征くのであるが、それより自分の任務の方がより大事だという気持ちを表わしたものです。

遠藤 しつこい様ですが、手記には行く先々で歓待を受け、お酒を飲んで次々前進して行かれました。私だっただけは建前として明るく豪快に振る舞ったとしても、本心は矢張り悲しいのではないのかと。お父上の気持ちは別として、ご本人はどうだったのかなあと思わざるを得ません。

吉武 それがね、私はあの時代の人と現在の人の考えの違う所だと思えます。男の場合、会社へ行って何時も家族の

事許りを考えている訳には行かない。仕事を優先させる。唯寝た時等にふと思い出すことはありましたが、年中家族の事を思っていたということは、先づ無かったですね。

遠藤 例えば爆撃して帰って来る作戦の場合とは違って、特攻隊は生きて還ることは念頭に無い訳で、普通の作戦行動なら、自分の技量が優れていれば敵機を打ち落して帰って来ることが出来るではないですか。そういう場合は戦場で死ぬかも知れないけれども、生還出来る希望もあるではありませんか。それが特攻隊ではそういうことが全く考えられない訳ですね。

吉武 死することを前提としています。唯ね、死というものは付いて来ものです。それより任務が第一なのです。

遠藤 死ぬのが任務という感じですか。吉武 いや死ぬのが任務ではなく、任務を達成するという事が我々の努めなのです。特攻の場合は任務を達成し必ずそれに付いて来たのが死で、死することに依って任務を達成することなのです。

遠藤 それは理屈として判るけれど、感情的に……。

吉武 あの当時の考え方としては、兎に角俺が征ってやればある程度戦勢を

挽回出来るのだと、又国の為になるのだという事で征った訳ですから。

遠藤 参謀総長の訓示を読んでみるとこれはもう駄目なのではないかと感じておられたのではないかと。今この文章を見ると・・・。

吉武 そういふ風に取りれますか。

遠藤 はい。

吉武 それは反対ですね。むしろ我々が征つてやればある程度出来るのではないかと気がなりましたね。その訓示を聞いて、日本は駄目なのではないかという様な感じは全然無かったですね。

遠藤 そうするとこの様に印刷されたものから、私達の世代はこう感じるといふことと、現場で実際に訓示を聞いた方とでは可成り感覚的に差があったということですか。

吉武 確かにそうだと思いますよ。この中に一寸書いてありますが、大井少尉が言っています。士官学校の予科本科の間に死とは生とはと一生懸命に考えたが、戦地に来てその様な事に何と馬鹿な苦勞をしたものかとつくづく感じたと書いています。それは何かというと、我々の与えられた任務は、正に大東亜戦争の天王山という華々しい局面に際会して与えられたもので、嬉しくて嬉しくて仕様がないと書いていま

す。そこでは生死ではなく、先づどうしたら成果を發揮できるのか、これのみを考える。それによって生も死も付いて来る。これは富永恭次さんの詩の中にもあります。非常に良い詩で、軍司令官室で握手した時にはえらい人だ

と思ひました。詩には、「不動石腸靖皇国（不動の石腸皇國靖し）崇高如神

將士姿（崇高神の如し將士の姿）」この次ですよ。「一身軽然大任重（一身軽けれども大任重し）不怖死亦勿

求死（死を恐れず亦死を求むる勿れ）」これは生死を考えずに大任を果してくれ、と言ふことだと思ひます。

遠藤 昭和19年12月だから未だそんな感じであったのが、沖繩戦になると大分状況は変わったといふことはありませんか。

吉武 戦況といふものは、後から考えるとこうだったと判るのであって、沖繩戦でも特攻で征つた人は、矢張り沖繩を救え、日本を救えといふ気持ちで征つたと思ひます。もう負けるのだから嫌だなといふ気持ちは無かつたと思ひますよ。

遠藤 嫌だといふ気持ちは何処からも伝わって来ないのですが。でも例えば飛行機の整備を女子挺進隊員がしたり、ガソリンが足りない等の状況を考えると、これはもう危いのではないかと

いふ気持ちがよぎらなかつたのか。若しよぎつたとしたら、自分達のその攻撃のやり方に不安を感じなかつたのかなと、現在の戦争を知らない世代の人は思ふのですが。

吉武 大変な時代になりつつあるとは皆感じていたと思ひます。であるが故に皆征つたのです。

遠藤 後の者にはその理解が中々うまく出来ないのです。

吉武 大変な事態になつたのだから、一身を擲うつて征こうといふ気持ちになつたと思ひますよ。戦争がもう終るのだから今征つても駄目ですつまらない、といふ様な気持ちの人は一人もいなかったと思ひますね。

遠藤 そこまで今の若い人は考えることは無いでしょうし、バックボーンが違うからだとしか私達には推察出来ません。

吉武 それは戦後の教育だと思ひますね。何も戦前の教育が良くて戦後の教育が悪いと言ふ積りはありません。然し余りにも今の教育はひどい。何をしているかといふと、国や社会の事は考えずに自分さえ良ければ構はないと言ふ。自分が儲かるなら何でもやる。自分に利益があるのなら大切な人の命を奪つてでも、といふのが現在の風潮です。これは戦後教育の非常に悪い所

ではないですか。

遠藤 個人主義・・・。

吉武 個人主義ではなく利己主義です。遠藤 日本は8月15日以降9月に米軍が入つて来て途端に変わってしまった訳ですね。吉武さんが手記にある様な体験をされて日本に帰つていらして、どんなお気持ちを抱かれたかに就いてお聞きしたいのですが。

吉武 変つたなあと思ひました。こんなに人の心が一夜にして変わるものかと思ひました。それと私は内地に帰る積りは無かつたのです。台湾で終戦となつて台湾の山に籠つて台湾人になろうと思ひましたので、台湾残留組を志願したのですが在台湾日本人は全員内地に引揚げよといふので、嫌々内地に帰つて来ました。そういう記憶があります。基隆から鹿兒島に上陸して色々な人に出遭いました。埠頭で手を合

な人に出遭いました。埠頭で手を合せて拜む人、そうかと思つと石をぶつけて、お前らが良く戦わんからこんな事になつたとのしる人、或はアメちゃんの手にブラ下つて歩く女、然し

果して日本人の心が全部が全部そうなつていたかといふと、私はそうは思ひませんね。ああいう時代には時勢に乗つて声の大きい奴が一番目立つので

す。本当は底辺に堅実な考えを持った人達が沢山いたと思ひます。現在の

人々もそうだと思いますね。

遠藤 私は父が戦争に行った世代なので父から色々話を聞いているので、学校で学んでも本当にそんなのかなあという様な事がある訳です。それが今こ

うやって子供を育てる様になって、子供が学校で習って来る事と、私が父から直接聞いていた事との間に随分ギャップがあるのです。その時にそれ

違ふんじゃないと言いだしても、色々詳しく事実を知らないものですから。

私達より少し上の50代、60代の方々はあの戦争がどんなものであったのか多少とも戦争に関して知っておられます。

そういう方々は、例えば東京大空襲はこんなだった、食糧が不足して大変だったとか、そういう様な事語り話をされるのを聞いて家の子供達は育つて来ているので、例えば南方で日本

兵はこんな事をしたらしいと教育されて来る。でも私は父から聞いた話ではそんな事語りではなかった筈で、いやそうじゃないんじゃない、と言いだく

ても事実を知らないのです、皆さんはそう言うけれども本当はこうだったのよと自信を持って言えない。父はもう亡

くなりませんが、そういう方々の話を沢山聞いて理解して、子供達に自分の口から伝えられれば学校で先生から聞くより、親の口から聞いた方が毎日接

しているのだから良いかなあ、と勉強

していたいと考える様になりました。何かこういう事をやってみたら、こういう事を考えてみたらという様な事があつたら教えて頂き度いと思うのです

が。吉武 難かしい問題ですね。矢張りそれは歴史を良く研究することでしょうね。歴史を研究する上で双方の歴史を見なければならぬ。相手の言い分を

聞いてみる必要もあるし、日本の本当の歴史を昔から現在までずっと研究すること、そうすれば何か或る程度まともな道が見えて来ると私は思います。

今の歴史教育は無茶苦茶で歴史教育ではないですよ。唯敗戦後押し付けられた教育をその俣やっている。一方的な歴史しか聞いていない。本当の日本の

これ迄の歴史を考えていない。占領時代はそうでしょうけれど少くとも日本が講和条約を結んだ以後は、日本が主体の考え方を教育の中に持って来なければ嘘と思います。それが占領時代の

言論統制下の強制的なものをその俣つけて来ている。これが間違いの基ではないですか。講和条約締結後は本当の

日本に立帰らなければならなかったのに、その点独乙はえらいと思います。遠藤 吉武さん達の年代の方がもっと発言して下されば、今日に至るまで

もっと良かったのになあと思います。

吉武 私もこの手記を書くに当たっては、石腸隊遺族の方が苦心惨憺して資料を集めて「石腸隊拾遺」を纏められた。それをお手伝いしている内に今迄の記憶と時間経過と色々な事実が噛

合って来たのでこれを書いたのです。今言われた様に何で我々がもっと語らないのかというのは確かにそうなので、私も最近昔の事を、我々が感じ考え

た事を何かに残しておかないといけない、ということを感じ始めています。それ迄は戦争の事は一切語らず、出し

や張ったことは言うまいという思いもありましたが、最近は何年を取ったせいですかね。

遠藤 特攻隊の方の遺書とか、えらい方のお話とか、文字になったものを見ると、私達は書いてることはそうだろうと思うのですが、その裏にはもつ

と何かがあつた様に思うのです。不快感の様な事だけではなく、もっと書かれざる何かがあつたのではないかという気がします。そういう事は書いて呉れる人がいないと後世に伝わらないと思

います。吉武 そうですね。確かにそうだと思います。遠藤 明日出撃する。今日これから出るという様な方は細かい事は書かな

かったと思うのです。日本の精神文化

として細かい事は余り言挙げしない面があつたと思います。そうするとこれからの人達に、そういう時代の人々の心が伝わって行かないと思うのです。

吉武 私もそう思います。この中で特攻隊はどういうものなのかという真髓が出てくる所があります。というのは我々の隊長が軍司令部に行った時、参

謀に石腸隊の隊員の闘志は極めて高く、乙種学生訓練では特に艦船攻撃訓練を十分積重ねて来ており、一回限りの

体当り攻撃とせず何回でも思う存分決死の攻撃を繰返して、戦果を最大限に挙げ続ける戦法、勿論生還は期し難い

がこの戦法の採用を懇請されたが、参謀曰く、それは特攻の趣旨とは異なるから駄目だと言われた。特攻の趣旨とは何かという事は隊長も考えられた

でしょうが、そういう戦果を挙げる以上何か精神的な、或は国民を奮起させ、或は敵に恐怖心を与えるという様な面での効果が大いなのだ、ということ

を言わんとしておられたのではないかと気がします。そこ迄は説明しなくてもそれが暗に特攻の人達が考えてやっていると呉れ、ということではあるまいかと高石隊長は察して、それで俺が一番先に突っ込んで模範を示すから皆付いて来いと言われた。

遠藤 そこが吉武さんが一番おっしゃり度い事だと判るのですが、後の世の人間には精神・気持ちという点で中々理解出来ない所ですね。でも御本人がおっしゃるのですから。

吉武 それで書いてある様に皆喜んで征ったのです。

遠藤 判りました。

吉武 命が無くなる。淋しいなと思つたことは一度も無かつたですね。唯、今言われた様に親の事を思わなかつたのかという、それは寝る時などにふつと思ふことはあつても極く一刻で、日頃は任務達成を如何にするかということが第一条件でした。

遠藤 長い間有難うございました。

菅原 私は遠藤さんがもっと色々な事を話せとおっしゃつたこと、尤もと思いますが、同時に逆に言いますと、私は鎮魂という航空碑奉賛同人会の会誌の記事を集めています、その中に神崎美恵子さん、昭和18年のお生れで父上が19年に戦死され、戦後母上が再婚されたこともあり、父上の事を知らずに育ち、父上が靖国神社に祀られていることも御存知なかつた。年を取られて疑問を感じ出して、先づ厚生省へ行かれて父上の兵籍簿を調べ、佐世保の海兵団に入って最後に油槽船の機関長になって、比島海域で昭和19年に戦死

されたことを知る。それを契機に当時の生存者がおられると知つて訪ね、それが又次の方へと繋つて行く。父上と一緒にだつた方、そうではなくても機関科という船が事故に遭つた時に一番助

かる見込の少い部署で生残つた方の話を聞く、その間色々の文献を調べ乍ら自分なりの戦争観を持つ様になる。アメリカが赤十字マークの付いた阿波丸を撃沈したとか、戦争は勝つ為には手段を選ばなくなる、その窮極例として東京大空襲があり原爆があつたということ

を認識される。そういう努力の過程で戦後教育が非常に偏つていることが判り、結果として靖国神社に参拝される様になる。そこで参道で伊藤直之さんその他の方々が、特攻散華者の肖像画や突入場面の絵を展示されておられるのに出遭い、叔父さんが戦死された昭和18年9月20日の飛行第60戦隊昆明爆撃之図が目に入る。僅か17日間自分と生を共にした叔父さん。画いた伊藤さんととの間に深い絆が形成される。

私は東条さんが、大東亜戦争を理解するには少なくとも阿片戦争に遡つて歴史を勉強しなければならぬと言われたが、それを昭和5年からの15年に限つて取上げること自体が非常におかしなことと思います。私は南米コロンビアに駐在して、コロンブスが新大陸

を発見してスペインが南米の侵略を始めた時から勉強しないと駄目だと思つた。ずっと白人中心の史観が罷り通つています。

遠藤さんが吉武さんの様な世代の方をもつと発言すべきとおっしゃること

は当然ですが、疑問点を自ら探究されることも大事だと思います。問題点が次々と派生して来る筈です。色々な手記、反軍に徹した人の手記も読んで遠藤さん自身の見識を構築される事が一番強いと思います。

遠藤 私もそういうことで、二、三年前から特攻隊のことを考えて今度劇を作つたのです。それをやり乍ら思つたのは、私の様に考えるのは矢張り少数派なのだなあとということ、何処で何を言つても、そんなことを言うのは貴女だけよと言われて了うのです。そんな筈はないと思つても周りにそういう方がおられないのです。

無意識の裡に形成されて了うのです。元來武士はいざという時には殿様を、同時にその下にいる婦女子・子供を守る、その為に努力する中に、自づとさつき吉武さんの言われた様な気持ちを持つ様になるのです。

今の時代にその様なことを考えることは難かしいであらうけれども、明治維新の頃西欧列強は、日本に牙をむいていた訳で、日本は植民地化されることを避けようとして必死に頑張つた。

それが日清戦争であり、日露戦争に至つた。そうこうしている中に、第一次大戦後国際連盟が結成され、日本は直ぐ人種平等決議案を提出して欧米中心の風潮に風穴を開け様としたが、あつさり否決されて了う。アメリカやイギリスの考えでやる訳だから、この野郎と思つて来ているのです。従軍された多くの方々の体験はそれぞれ異つている中で、皆がどう行動し何を感じたのか。戦場体験の有無、私の様にヒヨコで終つた者とは又違つています。私達同期生の中には戦後共産党に突走つた者もおります。人間は多様な面を持っていますから、感じ方も人様な面があります。

私としては大いに遠藤さん自身の歴史観を打立てて頂きたいし、その為に

は我々世代以上の者も、もっと発言し書かなければならないのは当然のことと思います。

遠藤 そんなおこがましいことを言う積りは毛頭無いのですが、こうやって直接お話を伺う機会なんて他の人には無くて、本当に私は恵まれて、お蔭で色々な方とお会い出来て・・・

菅原 私は神崎さんの書かれたものを読んで、父上が靖国神社に祀られていて、ことすら知らずに育った方が、歴史を勉強されて確固たる見識を持つ様になられた。こういう戦後世代の方がおられるということ、そして今日初めて遠藤さんにお会いして、目下は例え少数であるにせよ頼もしい若い世代の方がおられることを知って、大変心強く感じます。

吉武 本場にそうですよ。この様に疑問を抱いてそれを質そうとする気持ちですね。最後に私が比島山中にいた時、パイロットですから第一線に出て行く訳には行かない。処が第一線の将兵はどういうことを言っていたかという、免に角我々は東京を守るのだと。何で東京を守るのかというと、出来るだけ敵を引付けておいて要するに東京ということは内地ですね。内地の軍備がより充実することが出来る。自分達の死闘によって同胞を救うのだ。この信念

と希望を持って彼等は闘い且つ死んでいったのです。玉砕ではなく持久戦に持込んだ。このカガヤンの溪谷、食物はない。水を飲めば腹をこわす。そういう状況下で良くその様な気持ちが続いたなと今つくづくそう思います。それが戦後の人には理解出来ない。それと各国の国民性を理解する必要があまりです。ソ連がどんな事をしたか、アメリカはどうか。

遠藤 歴史を見なければということですね。

吉武 アメリカのハル・ノートはひどいものです。あんな無茶苦茶なことはない。それは今イラクに対する態度と良く似ていますね。本場に。査察を拒否すれば国連が何と言おうと攻撃すると明言しているでしょう。全く当時の日本に対する態度と同じです。アメリカのそういう政策と国民性も良く理解して欲しいと思います。

遠藤 それは歴史を勉強するということですね。本場の事をもっと一杯言っと下さる筈だと思つので、少し上の世代の方の話を聞くのではなく、もっと先輩の実際の戦場体験がある方、当時大人であった方々のお話を聞きたいと思ひました。そういう積りで吉武さんのお話を伺って勉強させて頂いた次第です。

吉武 どうも有難うございます。

菅原 では私から一寸。吉武さんは初めに下志津の乙種学生軍偵班は、地上戦協力の戦技用兵をやると書いておられます。処が後に比島で高石隊長が反覆攻撃の意見具申をされた時に、軍偵班は艦船攻撃を十分訓練していると言われていることは、57期の下志津乙種学生軍偵班は、所謂跳飛弾攻撃に専念されたのですか。

吉武 最後はね。

菅原 最後はですか。

吉武 初めの内は勿論本来の軍偵の訓練を一通り受けましたが、戦技そのものは殆んど艦船攻撃。

菅原 それは乙種学生として在学中どれ位の期間ですか。

吉武 7月から11月迄、4、5ヶ月です。乙種学生としては4月からで、4、5、6月是一般訓練。

菅原 訓練期間の2/3位が艦船攻撃に充たされた訳ですね。

吉武 艦船攻撃ともう一つは潜水艦捜索と攻撃、海上の事許りやりました。

菅原 従来の直協訓練から教育内容が一転したその背景を、軍偵班としては理解されていましたか。

吉武 そうです。

をするのだという気はしました。

菅原 そうですか。そうして11月5日に四航軍配属の命課を受け、と号要員だと、而も極秘事項であると。その時と号要員即特攻要員であるということに判って居られたのでしょうか。

吉武 それは知りませんでした。と号とは何であるかと。色々聞いてみると軽爆(銚田)でも何か突込む様な話であり・・・

菅原 何時頃どの様な形で体当り攻撃であると知ったのでしょうか。

吉武 初め任地発表するから集まれと言われて第三教育隊の河村中佐から命課を受け且つと号要員であると。その時は判らなかつたのですが、杜行会が開催され参謀総長の訓示を聞いたりますの中にそうだなと。

菅原 以心伝心で自覚された訳ですね。反復しますが11月5日にと号要員と言われた時には、未だ特攻とは判っておられなかつた。

吉武 8日にはもう判っていました。

菅原 それはもう一度全員を集めて、実はこれこれこうと正式に説明を受ける様なことは無かつた・・・

吉武 はい、それはありません。

菅原 石腸隊はと号要員として任務の内容を自覚されて、勇んで銚子を出発された訳ですね。

吉武 それともう一つ。良く志願か命令か、という事が言われていますがそれはおかしいと思います。軍隊では唯志願だけという様なことはあり得ない。最終的には命令です。それが軍隊です。

我々はと号要員即特攻と判つても別にどういふこともありませんでした。もう一つ、石腸隊は志願の形を取らない

という判断を下した上司の方はえらかったと思いますよ。取らない方が思遣りがあった処置だと思います。何故なら57期軍偵班は全員一緒に征くのだから今更志願も糞もない。それを命令として受けた方が非常に良かった。そういう点で私は上司は考えられたと思います。全員が征くのですから。

菅原 熱望、希望、希望せず、と個人の意志を問うた形……。

吉武 それは多くの人の人の中から選ぶ場合は当然そういう形を取るでしょう。

菅原 その辺りが命令か、志願かという問題になる訳で……。

吉武 個人の意志を問うことは、多数の中から選定する参考にはなるけれど決定は命令です。我々の様に全員一緒に征く時は志願を問う必要はない。

菅原 11月7日夜三晩続けて伊藤屋で宴会をされた時に、終り頃には女の人達が沈み勝ちになったという事は、5日にと号要員として発令され丸二日

経った時にはそういう人々も、もうそれとなく察知していた……。

吉武 ということはその前の日にお偉方が見えて壮行会を催した時点で判っていました。

菅原 滅多にない事をやる。今迄こんな事は無いと。

吉武 しっかりやって呉れと言われ直接的に何も言われなくても何となく判るものです。女の人達は終り頃には沈んで座は白けていました。

菅原 今でも特攻は命令か志願かにこだわる人がおられます。石腸隊の例もあれば借行に載った石橋62戦隊長の例もあります。それと大勢に対して意志を問うたり、一歩前へとかの形もあつた。それぞれその時の情況と理由があつて取られた措置であり、それらをひっくり返して命令か志願かと決めつけるのも史実の探究としてはどうかと思

います。

吉武 志願にせよ最終的には命令です。マスコミの人達は、志願か命令かと盛んにそののみを言いますが、そんな簡単なものではありません。

遠藤 最近小学生向けに出た特攻隊のことを書いた「翼のかけら」という本があり、さっき言われた様な事が書いてあつて、私なりに感じたことを申しますと、美濃部さんという海軍の隊長

さんが、自分の部下には夜間反覆攻撃戦法を取らして貰いたいと意見具申して認められ、その部隊は特攻の命令を受けなかったという事を立派な事として書いていて、一方大西長官の事に触れて、特攻に反対する者は俺がブツッ斬るといふ発言が引用されています。

これでは大西長官の事例と美濃部隊長の事例が、言い換えると大きな局面の事と、限られた一局面の事が並列して存在し得た印象を与えるのではないかと思います。それは間違っていると思います。その処はこれから先誤解されることもあろうかと思うので、当事者であつた方々がその辺の事情を発言しておかれた方が良いと思つて申し上げました。

吉武 硫黄島に敵が上陸して本土防空が任務の第三航空艦隊が、もはや全員特攻の戦法を採用するしかないという方針を示した時に、美濃部隊長は高石隊長と全く同じ観点から、夜間の反覆攻撃戦法の採用を意見具申して容れられ、その部隊は特攻隊を出さなかつたのですが、この場合は、第三航空艦隊として初めて特攻戦法を採用しようという特殊な局面で成立したことで、この事と戦局全般の判断から為された大西長官の事例が並列して存在し得たといふことではありません。美濃部さん

は、部下を特攻に出し度くないということからではなく、夜間反覆攻撃によって戦果を拡大し得るといふ技術面の確信があつて、そう主張された筈です。石腸隊と美濃部隊とは、その時の情況の相違が然らしめたと考えられます。

遠藤 大局的なこと、一局面のこと、美濃部さんの様な例はどの位あつたのか、私が知らないのかどうか判りませんが、文字として同じ行数位に書かれていると、現場で同じ位そういう事が起つていたのではないか、と思ひ込んで了う程の影響を受けます。

吉武 上の人は特攻に出す事を本當に不憫に思つたでしょうね。出し度くないという気持ちは多分にあつたでしょう。けれどもそういう気持があつても出さねばならない状況に至れば出したでしょう。ですから特攻隊の運用にはそういう雰囲気強く見られました。普通の攻撃隊の様にそれ行けそれ行けとはやれないのです。成可く温存するということは、集中的に運用して効果を挙げる狙いもあつたでしょうが、そうではない配慮が上の人にあつた様に思われました。

遠藤 色々と貴重なお話を伺わせて頂いて大変有難うございました。

特攻隊絵葉書発刊に因んで

③

—それらの絵にひそむもの—

震 洋

水上特攻の絵は陸軍の①を画いたものであるが、抑々このような戦闘行動は海軍の分野である。絵葉書に②を採ったのは松本武仁画伯の油絵が靖國神社に展示されていたからである。ついでにはここで震洋のことも述べておかねばならぬ。

〔概説〕震洋（通称③艇）は海軍唯一の水上特攻艇である。この艇は船先に二五〇キロの爆装をした木造合板製の高速ボートで、敵の上陸船団が泊地に入ったら、夜暗に乗じ集団で奇襲し体当りで相手を撃沈しようとするものだった。舵輪に固定装置を備え、救命胴衣をつけた搭乗員が後方に脱出するようにはなっていたが、実際には生残ることは不可能で、特攻隊にはかなならなかった。

③艇の試作が決定したのは19年4月で、同年8月には早くも正式兵器に採用され震洋と命名された。1名乗りの1型と2名乗りの5型とがあり、船先の爆装は同じだがそれ以外に1型には

12機噴進砲2基、5型には更に13機機関銃を搭載していた。また無線も装備された。

搭乗員は志願者をもって充足し、19年7月から第一次要員の教育を開始した。教育修了者をもって部隊を編成したが、震洋隊の編成は1型の場合50隻で、隊長、艇隊長3名、搭乗員50名、5型の場合25隻で、隊長、艇隊長2名、搭乗員50名となっていた。これは突撃隊で、ほかに基地隊が配置された。

震洋隊は小笠原諸島と比島方面を最前線とし、それ以北本土までの間敵上陸の顧慮ある個所に逐次展開した。その数14隊に及ぶ。そのうち出撃したのはルソン島コレヒドールに進出した6個隊と、沖繩本島金武湾の2個隊である。前者は20年2月15日に出撃、大型上陸支援艇撃沈等の戦果を挙げている。後者は4月4日未明、敵歩兵揚陸艇82号を撃沈した。

〔戦例の一端〕沖繩本島金武湾に配置されていたのは、第22震洋隊（隊長豊広稔中尉海兵72期）と第42震洋隊（隊長井本親中尉予備学生3期）であった。20年4月6日の朝日新聞の一面に「駆逐艦一隻を轟沈」「水上特別攻撃隊敵艦船群に突入」の見出しで、「中

部太平洋基地特電」として3日夜金武湾を出撃し敵艦船に突入し駆逐艦を撃沈したことを報じている。豊広中尉率いる1型5隻のうち、市川正吉・鈴木音松両2等飛行兵曹搭乗の1隻が体当りに成功している。視界の狭い艇からは相手はとて大きく巡洋艦のようにみえたという。

火柱を目撃したのは豊広隊長とその僚艇であつて、豊広中尉は戦後までこのことを報告できなかった。というのは、豊広艇は暗夜で目標を見失い基地に帰ったとき、基地隊長は移動命令を受け既に無線機を破壊してしまつていたのである。その後は陸戦となり終戦まで国頭地区の山に立籠つていた。

〔震洋隊員の決意〕第12震洋隊長松江田義久中尉（海兵72期）はマニラ湾で戦死したのであるが、内地出発に際し両親宛に次の遺書を残した。
生ヲ皇国ニ享ケテ天恵洽クシテ奈々悠々タル二十有余年君ノ恩宏遠深厚ナル一死以テ酬イントシテ余リアルモノニ候 義久斯ニ大任ヲ拝シ恐懼感激措ク処ナク唯々身ノ光榮ニ戦クモノニ候 一髪尚軽ク君恩ノ重ナル今日程痛感セルコトハ御座無ク候 身更ニ生還ヲ不期親ニ先立ツ不幸ノ罪何卒御許シ下サレ度候
（幼児病弱だったのに育てて下さつ

たことを述べているが一部省略）

今日ノ空誠ニ御両親様ノ賜ニ候 兄上様姉上様弟妹ニ対シ生涯ノ恩ヲ謝スルト共ニ小生ニ代リテ忠孝ヲ致スベク御願仕候 此ノ度ノ戦ハ百年戦争ニ候ヘバ忠ヲ楠氏ニ比シ孝ヲ尊徳ニ比スベク候

永ラク御付合下サレタル皆々様ニ対シ宜敷ク御伝ヘ下サレ度尚若キ可愛ユキ数百ノ部下ノ御遺族ニ対シテハ誠ニ氣ノ毒ニ候ヘバ小生ニ代リテ深く謝シ下サレ度ク候

最後ニ謹ンテ大日本帝国ノ万歳ヲ御祈申上候

昭和十九年九月十日 義久 御両親様

ただ一すじに 彼方の空の紅を 思ひ込むとき



第一御楯特別攻撃隊

ビデオの解説文

此の度第一御楯隊と義烈空挺隊について、多くの人の視聴覚に訴え特攻隊員の精神を後世に伝えようと、それぞれ約22分ばかりのビデオを作り、二本建て一巻のフィルムに収めて広く江湖に問うている。ところでその語るところは文書化された戦史でもあるので、ここに全文を掲載し、会員諸士の参考に供することにした。

なお要図写真等を添えれば理解が容易とは思いますがそれはすべてビデオを見てもらうことにした。義烈空挺隊については紙面の都合で次号にのせる。

大東亜戦争においてB29の我が本土に対する戦略爆撃が、我が国主要都市の大半を焦土と化し、戦争遂行能力を激減させ、無条件降伏の一大要因となったことは明白である。

当初行われた、中国の奥地、成都周辺基地から飛来するB29の、北九州地区に対する爆撃は、米軍にとっては余り効率的な良い作戦ではなかった。

そこで米軍は19年7月サイパンを手

中に収めるや、我が海軍が使っていたアスリート飛行場を始めとするマリアナ諸島に飛行場群を拡張整備し、B29の主力をここに移し、日本本土全域に対する戦略爆撃の態勢を整え始めた。

サイパン基地からのB29の本土来襲は、19年11月1日関東地方上空に侵入した一機だけの高々度偵察に始まり、11月24日約80機による帝都近郊の発動機工場爆撃をもって本格的空襲が開始されたが、その直後の11月27日、サイパン基地のB29を撃滅する為、零戦隊の片道攻撃が決定されている。

このビデオはその零戦隊「第一御楯特別攻撃隊」の物語りである。

我が軍は当初から、その発進基地を爆撃により制圧しようとする作戦を考えていた。即ち、サイパン島飛行場に対する陸海軍協同の爆撃機による航空作戦を計画したのであるが、昼間の攻撃作戦は成功の可能性が全くない為、夜間少数機で一機ずつの波状爆撃を決定する事になった。

11月2日の第一回攻撃は、陸軍の第二独立飛行隊と、海軍の攻撃703飛行隊が、更に11月6日にも同じ部隊が硫黄島を中継基地としてサイパン島を攻撃している。機種は陸軍は97式重爆撃機、海軍は一式陸上攻撃機であったが、海軍の「銀河」、陸軍の4式重爆撃機

「飛龍」、百式司令部偵察機の爆装型もその後加えられた。

だが、夜間である為その爆撃成果の確認は不可能であり、それまでに延べ32機による攻撃を実施したが、半数近くが未帰還となった。

マリアナ方面の航空作戦を担当する海軍の第三航空艦隊(以下3航艦と略称する)は、このような戦況を考慮し、当初から戦闘機隊の統制による昼間強襲作戦を計画していたが、11月16日に作戦の実施が決定され、館山基地に於て、この攻撃に参加する零戦戦闘機隊の挺進攻撃訓練を開始した。

この零戦隊は編成当時から「サイパン特別銃撃隊」と呼ばれ、一応、潜水艦による救出計画が立てられてはいたが、その実態は特攻作戦と変わらなかったため、作戦終了後に、「第一御楯特別攻撃隊」として全軍に布告された。

その作戦経過を述べるに当り、まずその隊員を紹介しよう。

海軍中尉	大村謙次
飛行兵曹長	小野康徳
上等飛行兵曹	北川磯高
一等飛行兵曹	住田広行
一等飛行兵曹	東進
一等飛行兵曹	加藤正人
二等飛行兵曹	司城三成

飛行兵長	新堀清次
飛行兵長	上田裕次
飛行兵長	高橋輝美
飛行兵長	明城哲

聯合艦隊の布告に名を連ねているのは以上11名であるが、これ以外に松下武男一等飛行兵曹が参加している。だが松下機は超低空での進撃中に、プロペラが波頭を叩き、飛行が困難になった為、バガン島に不時着した。

その後12月中旬、松下武男兵曹は潜水艦により救出され原隊に復帰したが、20年2月16日、帝都上空に於て敵艦載機との交戦の際、第一御楯隊の亡き戦友の後を追って散華した。

さてここで第一御楯隊の使用した零戦艦上戦闘機の概略について簡単に触れておこうと思う。

この「零戦」の略称で呼ばれた戦闘機は、支那事変中の昭和15年9月、96陸攻による重慶爆撃の援護に初登場し、卓越した航続性能と優れた空戦能力を示したが、世界的に名を挙げたのは大東亜戦争開戦後である。

米英の戦闘機の二倍もある航続性能と、20mm機関砲2門の重武装は敵を圧倒し、緒戦から全戦域での活躍ぶりは、ゼロファイターの呼び名で、連合軍パイロットの恐怖の的だった。

零戦はその後幾多の改良が施された

が、我が海軍には後継機となる進攻用戦闘機は生まれず、次々と出現する米軍の新鋭戦闘機に圧倒され、残念ながら、かつての栄光は薄れていった。

第一御橋隊が使った零戦は52型三丙という最後の改良型で、20mm、13mm各2門を主翼に、13mm1門を胴体に装備していた。

館山基地で集中的な猛訓練を積んだ第252航空隊戦闘機317飛行隊の「サイパン特別銃撃隊」の零戦13機は、大村中尉が指揮して11月26日館山を発し、3航艦長官寺岡謹平中将等が搭乗する一式陸攻に誘導されて硫黄島に向かった。長官自ら作戦を指揮するとは、その並々ならぬ決意が偲ばれる。

その時、館山を発進して間もなく、零戦1機の増槽が脱落して途中で引き返し零戦隊は12機となった。

この硫黄島から先の誘導に任ずる彩雲2機も、木更津基地から硫黄島に進出した。彩雲は当時デビューして間もない最新鋭の高速偵察機である。

硫黄島に到着した特別銃撃隊と誘導任務の彩雲隊の搭乗員達は、その日午後の作戦会議で、三沢航空参謀から作戦行動の説明を受けた。

以下、この作戦に参加した彩雲隊の生き残り西村友雄さんに話して貰う事にする。

「私は彩雲1番機の電信員として、この作戦に参加しましたので、記憶する作戦行動の概略をお話致します。

1、零戦隊は、27日午前8時硫黄島を発進したら、マリアナ諸島北部のアグリガン島まで、彩雲1番機の誘導を受ける。そこからはマリアナ諸島の列島の東側を、島の頂上が見える程度離れて、高度50m以下で南下する。

目標のサイパン島アスリート飛行場を確認したら、その直前で超低空から、一気に高度300m以上に引き上げ、そこから急降下してB29を銃撃する。

その時、第一撃で炎上したら、次の目標を攻撃するが、第一撃で炎上を認出来なければ、同じ目標を再度銃撃する。しかし何れにせよ、帰りの燃料が不足するから、第三撃は行なってはならない。

そして第二撃が終わったら、速やかに戦場を離脱して、バガン島飛行場に向かい、不時着するように。バガン島には、我が軍の守備隊がいるから、不時着搭乗員は12月中旬、潜水艦で救出する事になっている。

2、彩雲1番機は、アグリガン島迄零戦隊を誘導した後、レーダーに探知されないように、列島線の西側を150km以上離れて南下し、零戦隊の攻撃予定時刻、12時10分の10分後に、目標上空

1万m以上の高度で、写真撮影を行い、戦果を確認する。

3、彩雲2番機は、ウラカス島附近までは、零戦隊の後ろを飛んで、そこからは単機でバガン島に行き、バガン島部隊の使用する、暗号書と連絡文書を投下する。その後は1番機と同様、戦果確認偵察を行う事とする。

指示された作戦行動は以上ですが、この作戦会議が終わって外に出た時、居合わせた参謀の一人が、零戦隊の若い隊員達に、「計画通りにバガン島まで帰るのには、サイパン上空で5分位しか行動出来ないがどうするか」と問いかけました。すると、彼等全員は間髪を入れず「突っ込みます」と答えました。側で聞いていた私には、今でもその言葉が耳について離れません。

その翌日の11月27日、零戦隊、彩雲隊18名の搭乗員を前に3航艦長官寺岡中将の訓示があつて、その後、寺岡長官と一緒に記念写真を撮りました。これがその写真です。

午前8時、硫黄島基地隊員の「帽振れ」に見送られて、元山飛行場を発進した零戦隊は、千鳥飛行場を離陸した彩雲に誘導され、一路南下しました。この日南の空は、綺麗に晴れ上がり、誘導には絶好の飛行日和でした。

私が座っていた彩雲の後部座席は、他の飛行機と違って、後ろの見張りがし易いように、後ろ向きでした。従って私は、2時間半の誘導中、零戦隊12機を正面に見ながら、向き合っていたわけです。その間、零戦隊員の決死の覚悟を思うと、万感胸に迫るものがあり、私は「もしも、自分がこの戦争で、生き残るような事があつたならば、この状況を遺族に伝えなければならぬ」と、心の中で固く誓いました。10時40分、アグリガン島が見えてきました。いよいよ零戦隊分離の時です。彩雲1番機の機長南少尉の指示で、縦員の広瀬飛行兵曹長は、分離の合図として、二度三度バンクをしました。大村隊長は、小さなバンクでそれに答えると、すぐ緩やかに主翼を左に傾けて、降下姿勢に入りました。列機が一斉にそれに従います。別離の瞬間です。我達3人は無言のまま、挙手の礼でこれを見送りました。

私は、最後まで見届けようと、目を凝らしました。アグリガン島の北側の空を、突入するように降下する零戦隊は、みるみる内に、小さくなり、点となり、キラキラ輝く紺碧の海の色に、溶け込むように、消えていってしまいました。

この場面における西村さんの話はこ

れで終わるが、分離していった12機の零戦はバガン島に不時着した松下機と、攻撃後バガン島に戻った明城哲飛行兵長の機を除き、永遠に日本軍の目に触れる事はなかった。だが明城機は、バガンまで追跡してきた米軍のP47戦闘機に撃たれ、戦死してしまつた。

おそらく、この明城機は、大村隊長から事前に「銃撃後は、バガンへ戻って報告するよう」指示されていたのであらう。

誘導任務を終えた彩雲1番機の行動について、再び西村さんの話を聞こう。「1番機は、大きく列島線の西側を迂回して、12時10分、高度1万450mで、テナン島の南端に到着しました。

そこからテナン島と、サイパン島を縦断北上するコースを飛び、垂直写真を連続撮影しましたが、飛行場にはB29の炎上を示す黒煙が見えません。

そこで、そのまま帰還する予定を変更して、反転南下し、12時40分まで偵察を続けました。しかし、その間も、黒煙は遂に見えず、後ろ髪を引かれる思いで、マリアナを後にしました。

その途中、バガン島を高度千mで通過し、零戦1機が不時着しているのを確認してから、15時17分硫黄島基地に着陸しました。

その後、私たちは、まだ帰っていない

彩雲2番機を待ち続けたのですが、燃料が無くなる時刻を過ぎても、千鳥飛行場には帰りませんでした。」

当時、2番機はバガン島に暗号書を投下した迄の事は分かっていたが、戦後、米軍の記録により、サイパン、テナンの中間で、P47戦闘機に撃墜された事が判明している。

ところが肝心の零戦隊の銃撃であるが、この日、硫黄島の無線通信所は、マリアナの米軍放送が、13時43分急に慌てた口調で「空襲！ 空襲！ サイパン、テナンに飛来する飛行機はグアム島に着陸せよ」と放送しているのを傍受した。そして、零戦隊が空母から飛来したものと判断したのであろう、索敵機を発進させる命令も傍受した。

空襲警報は14時18分に解除されている。翌々日の29日と30日、戦果確認の為に、彩雲1番機はサイパンへ2度飛んだが、天候不良とエンジン故障で任務を果たす事は出来なかった。

このようにして当時は、第一御楯隊の戦果は不明に終わったが、戦後、米軍の記録で次の事が判明した。

この日、アスリート飛行場のB29は第2回目の東京空襲に発進した約60機を除き、60機位が残っていたようであるが、米軍の記録では4機破壊炎上、6機大破、23機小破となっている。こ

の数は零戦隊の隊員達が予期した戦果より相当少なかったと思う。

それでも米軍に与えた脅威は甚大で、彼等はアスリート飛行場のB29を、グアム島に移動分散する処置をとっている。

だが、3航艦が多大の期待を込めて決行したこの作戦も、再度行われる事はなかった。

しかしこの特攻作戦は、当時の日本軍だから出来た事である。どこの軍隊にもこのような事が出来ようか。それにもまして驚嘆に値するのは、2撃まで行ったら離脱せよと言われたのに対し、自ら生還の途を放棄し、「最後は突っ込みます」と答えたあの精神である。

館山での作戦計画検討の時、高橋輝美飛行兵長は、「B29がいなかったら着陸して拳銃で戦おう」と言ったと伝えられている。

事実、米軍のB29最高指揮官ハンセル准将の談話によると、最後に着陸して拳銃で撃ち合い、米兵のカービン銃で斃された搭乗員を目撃している。

その搭乗員は大村隊長であったが、その勇敢なる闘志に感動した米軍によって遺骨は丁重に埋葬され、昭和28年厚生省の遺骨収集団によって懐かしい母国に帰り、母上の胸に抱かれた。

激戦の地、悲劇の島サイパンも今は

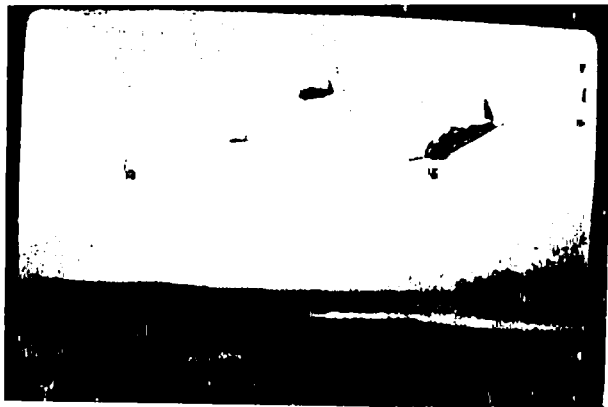
手近な観光地として毎年数多くの日本人が訪れているが、この第一御楯特別攻撃隊の史実を知る人は果たして何人のだろうか。

硫黄島の摺鉢山山頂に建立された第一御楯隊の碑はサイパンを向いて建てられている。

しこわしを打破らんの一念にわが身ありとは思はざりしか

平成の若者達に伝えなむ

かかるをのこのありし国ぞと



平成9年度事業報告

平成9年度事業計画に基づき、以下のとおり事業を行った。

1. 慰霊事業

(1) 陸海軍特攻隊戦没者合同慰霊祭

平成9年4月2日、靖国神社において陸海軍特攻隊戦没者合同慰霊祭を
挙行した。参列者は政財界要人来賓44名、遺族73名、会員 275名、併せ
て 392名であった。

慰霊祭終了後、私学会館において当協会の年次総会を開催した。

(2) 世田谷山観音寺・特攻平和観音年次法要

平成9年9月23日、世田谷山観音寺において、同寺が主催する第46回
年次法要に協賛した。当日は来賓38名、遺族55名、会員 243名その他
31名、併せて 367名の参列があった。

(3) 全国各地慰霊事業への協賛

1. 鹿屋慰霊祭 3月31日(飯野伴七評議員参列) 鹿児島・鹿屋市
2. 都城慰霊祭 4月6日(最上理事長参列) 宮崎・都城市
3. 万世特攻慰霊祭 4月13日(深川 巖評議員参列) 鹿児島・加世田市
4. 航空碑前祭 4月18日(最上理事長参列) 東京・市ヶ谷
5. 三ヶ根山慰霊祭 4月25日(同上) 愛知・三ヶ根山
6. 知覧特攻慰霊祭 5月3日(同上) 鹿児島・知覧町
7. 特潜会慰霊祭 5月17日(小瀬利春評議員参列) 広島・呉市
8. 楠会回天会慰霊祭 9月4日(最上理事長参列) 岐阜・下呂町
9. 原町慰霊祭 10月10日(同上) 福島・原町市
10. 特操会慰霊祭 10月12日(同上) 京都市
11. 水戸つばさの塔慰霊祭
10月19日(同上) 茨城・水戸市
12. 明野顕彰碑慰霊祭 10月24日(同上) 三重・明野町
13. 回天顕彰会慰霊祭 11月9日(小瀬利春評議員参列) 山口・徳山市

2. 慰霊碑建立事業

予定地を物色したが、決定をみず、継続課題となった。

3. その他の事業

- (1) 機関紙「特攻」 30.31.32.33 各号を発行し、会員その他に配布した。
- (2) 「特別攻撃隊」の頒布 頒布80冊 年度末在庫 260冊
- (3) P R用 絵葉書・ビデオの作製並びに頒布
 1. 絵葉書 作製 7000組(1冊8枚) 頒布 1884組 年度末在庫5116組
航空特攻、水中特攻、水上特攻等の油絵を葉書にしたもの。
 2. ビデオ 作製 270巻 頒布 256巻 年度末在庫 14巻
第1御橋隊、義烈空挺隊をビデオ化したもの。

以 上

収 支 計 算 書

平成9年1月1日から平成9年12月31日まで

(第5年度)

(単位：円)

科 目	予 算 額	決 算 額	差 異	備 考
I 収入の部				
1 年会費収入	3,500,000	4,644,000	Δ1,144,000	
2 基本財産運用利息収入	9,300,000	9,371,227	Δ71,227	
3 特別会費収入	5,000,000	4,629,000	371,000	
4 寄附金収入	20,000,000	2,456,910	17,543,090	
5 懇親会費収入	1,200,000	1,417,000	Δ217,000	
6 出版事業収入	200,000	1,984,610	Δ1,784,610	
7 雑収入	200,000	253,980	Δ53,980	
当期収入合計 (A)	39,400,000	24,756,727	14,643,273	
前期繰越収支差額	33,750,000	24,504,113	9,245,887	
収入合計 (B)	73,150,000	49,260,840	23,889,160	
II 支出の部				
1 管理費				
人件費	4,750,000	4,730,371	19,629	
旅費交通費	150,000	73,280	76,720	
通信費	150,000	135,772	14,228	
会議費	500,000	336,757	163,243	
事務所経費	600,000	625,826	Δ25,826	
消耗品雑費	500,000	409,936	90,064	
租税公課	150,000	210,000	Δ60,000	
予備費	Δ150,000	0	0	租税公課に充当
2 事業費				
慰霊祭等事業費	16,000,000	5,771,192	10,228,808	
特攻隊史実調査研究費	100,000	0	100,000	
特攻隊資料収集費	300,000	77,265	222,735	
出版事業費	3,500,000	4,663,643	Δ1,163,643	
予備費	Δ500,000	0	0	出版事業に充当
当期支出合計 (C)	26,700,000	17,034,042	9,665,958	
当期収支差額 (A) - (C)	12,700,000	7,722,685	4,977,315	
基本財産繰入額	10,000,000	20,000,000	Δ10,000,000	
支出合計 (D)	36,700,000	37,034,042	Δ334,042	
次期繰越収支差額 (B) - (D)	36,450,000	12,226,798	24,223,202	


該特攻隊戦没者慰霊平和祈念協会の平成9年度の計算書類について監査した結果適正であることを認めます。

平成10年2月23日

監 事

岡田輝彦  印

監 事

小松利光  印